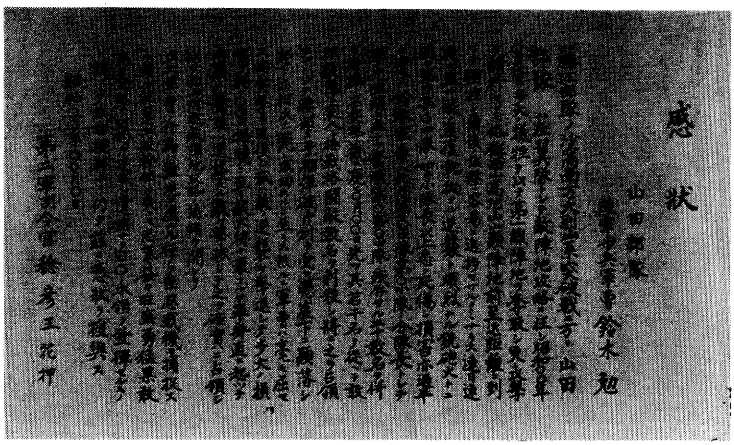


鈴木勉軍曹が拝受した功績を誇る個人感状

敵は後からどんどん兵力を補充してくる。敵壕でまったくの孤軍奮闘だ。（無念！）鈴木軍曹はどこをどう走ったのか、気がつくと味方の陣地に帰ってきていた。鈴木さんは「何が何だか、自分の行動さえわからなかった。もちろん戦友のことを知るよしもない」

ところで、このもようを谷ひとつへだてた後方の山で見守っていたのが鈴木さんのいとこの、第三大隊砲六番砲手（伍勤上等兵）の浜口四郎さん＝鳥羽本町＝だった。浜口さんと鈴木さんとの直線距離はわずか五百㍍ほど。浜口さんは「鈴木は小銃に日章旗をくくりつけているのですぐ見分けがついた。敵陣めがけ山をかけのぼり、転げ落ちまた突っ込む姿が手に取るように見えた。声が届くものなら、そら左に敵だ、右から砲弾だぞと教えてやりたかった」と回想している。

次は間柄さんの奮闘記。突撃の朝、第三大隊副官だった間柄中尉は中隊は戦死した小林中隊長に代わって中隊長を命じられた。上田大隊長は「必ず奪取せよ」と恩賜のタバコを与えて励ました。死の突撃を意味するものだった。軍刀を抜き放った間柄中尉は

部下を励ましながら突撃を開始した。第三小隊長代理、波多野済伍長（一志郡白山町字垣内）が「突っ込めッ」と部下をしった激励し、敵陣に肉薄して行く。が、波多野伍長も手投げ弾を浴び、腕から鮮血を吹き出して倒れる（時に午後二時。現認証明書によると磨盤山南側高地とある）間柄中尉はいつの間にか敵壕の真っただ中に突っ込んでいた。鈴木軍曹同様まったく無我夢中、気がつくと軍刀にべっとり血のりがついているから敵兵をたたき切ったものだろう。そのとき背後に手投げ弾がサク裂、その爆風と破片で気絶した。気がつくとタンカの上だった。（このときの破片はいまも右腰に一片残っている）

一方、土井少尉、荒木伍長も負傷。七勇士が敵壕内で壮烈な白兵戦を展開したのは三十分ほどだったろうか。敵は続々兵力を補充、手投げ弾、側防火器もいよいよ猛威をふるう。これにたいしわが方の後続突撃隊はまったくクギづけ。七勇士はせっかく敵陣の一角を奪いながら、くやし涙をのんで後退したのだった。

この日遅く、部隊本部へ届いた戦死者名簿には、次の兵の名がつらねてあった。（重複分は除く）▽曹長、細谷稔▽軍曹、山本喜十郎、玉池久光▽伍長、小林春男、渡辺清、松本登、水谷武夫、伊藤正一、山中周平、川崎順一、野呂源六、奥野力八▽上等兵、坂実、山口梅松、柴田英三郎、達精二郎、黒沢重朗、岸本愛三郎、西村源吾、大西清、柴田悦次郎、門晃、森田勇夫、住西末吉、西野清吉

〝この老骨ささげよう〟

――山田連隊長、悲壮な決意――

西山高地の死闘

攻撃隊を二線に分けての新戦法をとり、砲兵の集中援護射撃のもと敢行した十月十五日の、最後の総突撃も、多くの将兵を失っただけでついに不成功に終わった。暗然と、涙をのんで山を下った山田連隊長は、その夜も一睡もしなかった。そして悲壮な決意を固めた。「おれはこの山にはいってからたくさんの部下を殺した。部下の遺族は、この山田をうらんでおられるだろう。部下はみんなおれのかわいい子供だ。おれはもう子供を殺したくない。無理な突撃はやめた。しかし、部隊の名誉にかけても、一〇三高地（西山）はとらねばならぬ。あすはおれが突撃をする。この老骨をささげ、軍旗を奉じて敵陣におどり込み、いさぎよく倒れよう―」真っ暗な土間に安置してある軍旗に祈り、副官らにこういい放った。

明けて十六日。前線に突撃の命は飛んだ。将兵は、きょうこそ最後の日と、悲壮なおももちで戦闘準備を始めた。重い弾薬箱をかつぎあげたり、陣地を固めたり朝からあわただしい。しかし、砲兵の試射が始まろうとするころ、突然、軍から〝突撃中止〟の命令が出た。連日の戦闘で兵力もおち、疲労も激しい。一日じゅうぶん休養して、明十七日、神嘗祭（かんなめさい）のよき日を期し、一挙に占領したらよかろうという、同情ある命令だった。連隊長は涙を流して感激した。将兵も〝一日、命が伸びたぞ〟とこわばった表情をほぐし〝あすこそは、存分に戦って死のう〟と決心を確かめ合った。

連隊長は、戦闘指揮所を「岩山」に移し、第一線大隊の戦闘指導と敵情偵察を行った。そして、揚家寨守備に当たっている村岡隊（第五中隊、機関銃一小隊）を第二大隊に、また予備隊となっている第十二中隊を第三大隊にそれぞれ増加復帰させ、第一線の兵力増強を図った。これまでの体験で、地形の関係から砲兵の射撃だけでは敵短刀火器（機関銃など）を制圧することがむずかしいので、歩兵砲を岩山に、速射砲を磨盤山最高峰に各一門ずつ陣地変換をさせた。各隊は砲を分解し、切り立つ断崖をよじ登って陣地をつくった。この日も、敵の〝定期便〟で堀木上等兵以下四人が死に、越山一等兵以下二人が傷ついた。

○　○　○

第二機関銃中隊の分隊長だった一志郡一志町高岡出身、辻松兵衛さん＝旧姓、松田常＝の話。

辻分隊八人は、くる日もくる日も西山の敵とにらみ合っていた。わが陣地は、奪った敵壕をそのまま使っていた。敵陣との水平距離は約五百㍍。肉眼で敵兵の姿も見え、静

軍旗を奉じて第一線にある山田連隊長

かな夜など敵銃の操作の音さえ聞こえる。雨露と汗でぐっしょりぬれた軍服にはシラミがわいた。食糧はない。ふもとの畑からイモを掘ってきては生でかじる。やがて生イモではのどを通らなくなった。交替で、敵と反対側の山すそに降り、飯ごうでふかして食う。間もなくそれも受けつけなくなり、やむなくすりつぶして水といっしょに流し込んだ将兵はどの顔も栄養不足と疲労でげっそりやつれ、ただ目だけがギョロギョロ光っている。戦闘は毎日突撃のくり返し、その合い間には定期的に迫撃砲の盲弾が飛んでくる。これに応戦する味方砲弾とが、うなりを上げて頭上で交錯する。辻軍曹は次第にいらだってきた。(もし、敵味方の砲弾が、頭の上でぶつかってサク裂したら―)そんな恐怖感にとりつかれてくる。ガチャン、戦友の飯ごうの音にも思わずとびあがる。東の空に太陽が昇り始めると(どうか、きょうの命を――)と両手を合わせ、祈らずにはおれない。(おれは、別に悪いことをした覚えもないのに、おれだけが、どうしてこうも苦しまなければならないのだろうか)と内地の母を思う。金銭や地位などシャバの欲望はみじんもなく、そこにある自分は、ただひたすらに〝生〟のみを祈っていた。神に通じる祈りである。

ついにくずれた堅陣

――痛快!鈴木軍曹一番乗り――

西山高地占領

一〇三高地(西山高地)に一番乗りを敢行した軍曹、鈴木勉さん(七三)=鳥羽市安楽島八〇六=の奮戦記。死の突撃五たび、一〇三高地は文字どおり難攻不落だった。そして―。

十月十七日。きょうは神嘗祭の〝よき日〟である。

けさも戦線には深い朝霧が立ちこめている。第一線将兵は戦闘の準備をしながら「縁起がいいぞ」「きょうこそは、西山高地を奪ってくれるぞ」と悲壮な決意に満ちた目で、霧の中の敵陣をにらんだ。鈴木軍曹は、攻撃に先立ち、敵情偵察のため斥候二人を出した―。太田第九中隊長、間柄第十中隊長とも十五日の戦闘で傷つき、いまは鈴木軍曹が中隊長代行で第九、第十中隊合わせて指揮をとっていた。戦線整理の結果、残存兵力はわずかに二十四人。しかも前日（十六日）には頼みの水谷悟軍曹（一志郡一志町波瀬）まで敵情偵察中狙撃され重傷で後退、監視中の坂田一等兵も重傷、そのうえ下痢、発熱患者も発生していまは二十人足らずの兵力となっていた。（だが負けんぞ―）くちびるをかみしめた。死は覚悟のうえだ。十五日夜は、十六日の突撃に備え（中止されたが）部下にも遺書を書かせた。自分もおじあてに「たったひとりの母を頼む」また勤めていた神鋼電機幹部あて謝意の手紙をしたためてある。思い残すことはない―。

鉄条網爆破、突撃寸前の友軍

（だが、おかしいぞ。敵陣は――）けさに限り、いつも敵陣から聞こえてくる点呼の声も聞こえず、砲弾の定期便も飛んでこない。「敵のヤツ、どうしたのだろう」兵士たちの間でもそんな声がもれはじめたころ「敵は動揺しているぞ」「どうやら逃げじたくらしいぞ」斥候が大声をあげながら帰ってきた。（やっぱりそうだったのか。よーしッ）決心した鈴木軍曹は、直ちに突撃するむね大隊本部に連絡「それッ、突撃ッ」小銃を振りかざし鈴木軍曹は、真っ先に立ち、左翼の安全地点から突っ込む。「わあーッ」遅れじと喚声をあげて部下もおどり込む。敵は不意を食らったうえ、すでに戦意を失っていた。敵小銃の抵抗も弱く、側防火器も間延びしている。相手が心理的にひっ迫した捨て身の日本兵だからたまらない。うろたえる敵を突き、あるいはなぐり倒し、あっという間に占領してしまったわが方は無血、るいるい重なる死体は敵兵だった。時は午前七時三十分。難攻不落、十月六日に行動を起こしてから丸十二日間、その間死の突撃実に六回、ついに七回目の突撃によって奪ったのだ。「万歳ッ」の叫び声が大別山にこだまし、日章旗が朝風にひるがえった。――敵軍は、揚子江に沿って猛進撃するわが江南部隊によって、漢口があぶなくなったため、日の出を期して大別山脈一帯の防衛陣地を撤し、退却を開始したのだった。

個人感状に輝く今の鈴木勉さん

鈴木軍曹らは直ちに追撃に移った。鈴木さんは「幸運だった。戦闘としては十五日の方がひどかった。敵壕には薬きょうがうず高く残っており、いかに彼らの射撃銃弾が多かったかを物語っていた。わが軍の猛砲撃で山の形が変わってしまったほどだったが、背後にある背たけほどの交通壕はほとんど砲撃の損害を受けておらないほどの堅陣だった。わが軍が最も苦戦した敵陣すぐ下の鉄条網付近には友軍のおびただしい死体で、文字どおり、屍山血河と化していたが、これを無事収容できたのが何よりでした」と回想している。鈴木軍曹の西山高地一番乗りは当時講談社から絵物語として出されている。

第九中隊が独断突入

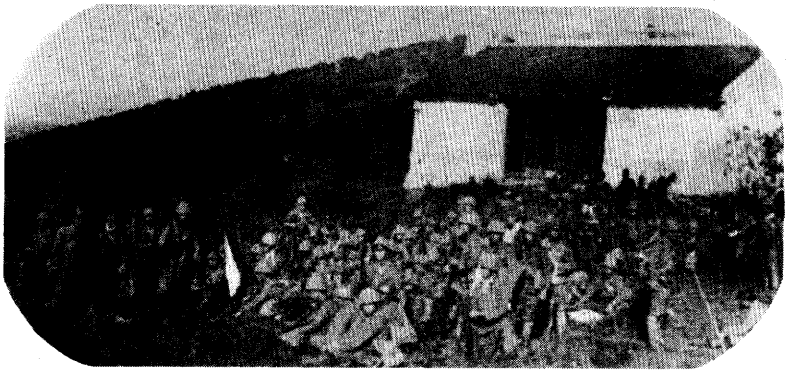
――ほとんど無血で占領――

西山高地占領

難攻不落の西山高地も、ついに十月十七日の佳日（神嘗祭）わが手におちた。桑名郡多度町御衣野二九七一、水谷昌雄さん（五十八年死去）は准尉で第十二中隊長代理だった。

同中隊の第一小隊長で出征した水谷准尉は、久我豊三大尉（桑名郡長島町）奥山中尉（津市）村田正明大尉（県外）ら中隊長が次々とやられてしまったので、代わって中隊の指揮をとっていた。だが、その水谷准尉も十一月の第一回突撃で、左手に六ヵ所も手投げ弾の破片創を受け、包帯でつっていた。敵はがん強で、陣地をすぐ前ににらみながら、まったくどうすることもできない。何度、突撃をくり返してもいたずらに損害を出すばかり。一帯の地形は、大体なだらかだが、何のしゃへい物もない草原。チェコ式機銃

の掃射だけでなく、手投げ弾を束にしてころがしてくる。やむなく壕にもぐり込む。隣の壕の戦友にタバコの火を借りようと、ちょっとからだを乗り出すとたちまち狙撃される。そっとはい出した衛生兵も弾雨を浴びる。食糧といえば、サツマイモでかろうじてうえをしのいでいる始末。こうして第三大隊の小隊長級以上は全部死傷し、残るは幹部の水谷准尉ただひとり、各中隊とも軍曹以下約二十人内外となってしまった。十五日、上田大隊長は兵をひとまとめにして一個中隊をつくり、十七日を期して最後の突撃を敢行せよと水谷准尉に指揮を命じた。上田大隊長は、水谷中隊の突撃成否にかかわらず、自らも手兵を率いて突入する決意だった。突撃を前に、水谷准尉に恩賜のタバコを与えた。水谷准尉は、とっておきのタバコを部下に一本ずつ分け、故郷に手紙を書かせた。ひとまとめにした手紙は、従軍記者に託した。水谷准尉は坪井従軍記者（新愛知）に「きょうまで生きていたことを故郷に伝えてくれ」と頼み、将校こうり（行李）から新しい下着を取り出して着替えた。死装束であった。覚悟ができると敵前約五十㍍の左第一線に鈴木勉軍曹の第九中隊、右第一線に第十中隊を配置し、その約百㍍後方の地点に予備第十二中隊（第十一中隊は連隊予備）を待

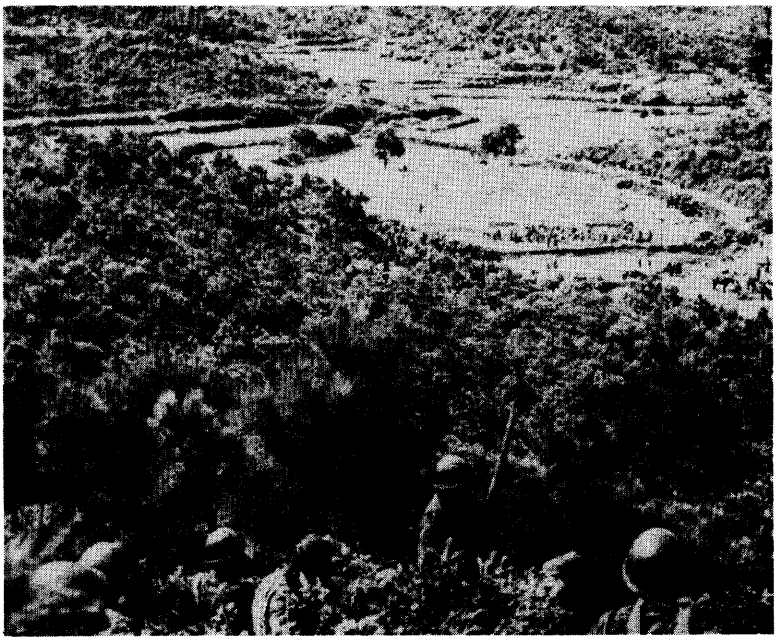


西山高地占領連隊集合、第33連隊の全兵力？

機させた。

十六日夜遅く、第一線陣地から伝令がとんできた。「敵に動揺の気配がうかがえます」「そうか」水谷准尉は直ちに大隊長に報告し、第一線には「払暁を期してやれ」と命じた。十七日午前七時ごろ、ついに鈴木軍曹率いる第九中隊が独断突入、ほとんど無血で占領したのだった。続いて突入した水谷准尉は直ちに部下を掌握、損害を調べた。「わたしはなによりもまず部下を思った。妻子を残してきたわたしは、やはり部下の家族のことが一番気になったのです」と語っている。

連隊の戦闘詳報によれば、未明戦線いたって静寂となるをもって、連隊長は第一線に対し敵情に関し報告を求めたるところ、依然敵情変化なきむね報告あり、第一線部隊は、右敵情捜索斥候に引き続き、独断突撃を敢行し七時三十分、



西山高地占領直後の風景

ついに右第一線大隊たる第九、第十中隊は西山を占領せり。

一方、同じころ中第一線の第六中隊（辻四五郎大尉）も一文字山高地に突撃し、無血で占領した。さらに戦果を最高峰に拡張、九時三十分には最高峰一帯を完全に奪取した。また、第一大隊は第二、第三大隊の突撃を見て、独断で李家凹高地向け攻撃前進に移った。こうして十二日間にわたる死闘も、十七日朝の敵の突然の退却で、あっけなく終った。「もし、漢口陥落があと数日でも遅れていたら第三十三隊はほとんど全滅していたろう」というのが従軍者たちの一致した回顧談である。この日連隊は、山田連隊長以下七人の負傷者（後述）を出したに過ぎなかった。

「お母さん、お母さん…」

――あえぎ息引きとる二等兵――

西山高地占領

西山高地攻略戦の十七日。朝霧の晴れ上がるころ、最初の高地の右高地は尾崎第三中隊、左やや低い高地は川村第二中隊の攻撃目標と決し、磨盤山南方高地の東方山麓から前進した。山は岩とかん木とで頂上のえん蓋銃座しか見えない。重火器支援のもとに前進したが、両高地の間からチェコ軽機の猛烈な側射を受け、肉薄は困難となった。

友軍の制圧射撃が終るとただちに敵の猛烈な射撃が始まる。松岡久郎中尉の発煙隊の煙幕も風向きの関係で十分な効果がなかった。

夕日が沈むころ、重火器の支援のもと、ついに両中隊は突撃を敢行した。右側からの敵の手榴弾攻撃は山腹を前進する五十人足らずの中隊の兵を苦しめた。

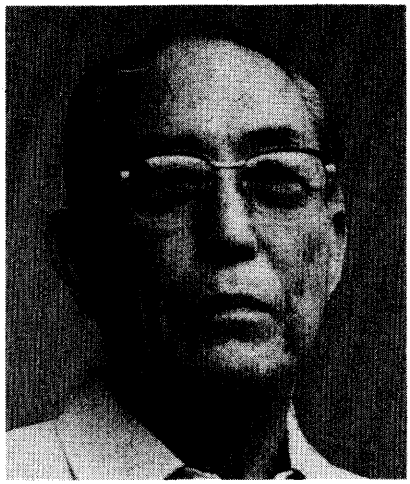
第二中隊は第二小隊（隊長代理松葉庄之助軍曹、志摩郡阿児町）を先頭に前進中、ラッパ兵山中宗一一等兵が頭部貫通で倒れた。松葉軍曹は勇敢にもえん蓋銃座の口から手榴弾を投げ込み、爆発のあと煙の中を頭から這って行く。

「松葉危いっ！やめろ」

という隊長の声も聞かず、

「大丈夫、大丈夫」

といってのそのそ入っていく。早くも敵は逃げ、火薬のにおいが充満していた。山も次第に闇の中に沈んでいく。



今の川村可夫さん

午後七時前、ようやく占領した。

この戦闘で川村万太郎分隊長の丸い銃身に小銃弾が直角に命中し、弾の頭部が銃身に食い入り、尾部が曲っている。「記念に持ち帰りたいなあ」と川村分隊長はその銃を抱きしめるようにしてつぶやいていた。

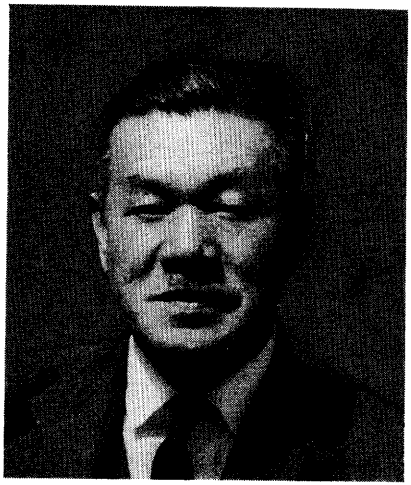
また川村中隊長の刀剣にも弾が当たり、サメ皮をえぐり、顔と右腕に手榴弾破片創を受けた。数日前山中で補充となったばかりの某二等兵は腹部貫通銃創を受け、担架で後送中、激痛にたえながら「お母さん、

お母さん……お母さん」と叫び続けること一時間半、包帯所で息を引きとった。

第二中隊長だった川村可夫さん（七〇）＝一志郡嬉野町宮古＝は「若い兵隊のその哀切な声がいまでも聞こえるようであのときの情景と哀感が影絵のように脳裏をかすめる。戦闘ごとに戦友を失い、日毎に身心の疲労が加わる大別山の戦闘はいつ終るものかと心が痛んだ。真夜中小用のあと神仏に手を合わせる兵隊の姿がしばしば見られた」と、当時を回想している。

○　○　○

この戦闘で勇敢な突撃をした松葉庄之助軍曹の兄、松葉清香さん（志摩郡阿児町立神）は中支戦線で石谷部隊に所属中、従軍兵士の心情をこめて「月下の歩哨戦」を作詞、ポリドールレコードに投稿した。長津義司が作曲、十四年十月新譜として発売され、田端義夫独得の哀愁切々たるバイブレイションが大衆にアッピールして大いに歌われ、「なつかしの戦時歌謡集」に入っている。



月下の歩哨線の作詞者松葉清香さん

占領後、直ちに追撃へ

――吊橋湾李家凹の線に前進――

追撃命令下る

十月十七日午前七時三十分。西山占領の報告を受けた山田隊長は、瞬間、両眼から大粒の涙をぼろぼろ落とし「よくやった、よくやってくれた」と何度も大きくうなずいた。戦死した多くの部下に黙とうした。そして立ち上がり、すぐに岩山高地に登り、すかさず追撃命令を下した。①連隊は吊橋湾李家凹の線に向かい前進し、両路口（ふたつぐち）方面への追撃を準備する②第三大隊は吊橋湾東方高地に向かい前進すべし③第二大隊は一部をもって最高峰を確保し、主力は吊湾東方高地に向かい前進すべし④第一大隊は李家凹南方高地向け前進すべし（協力砲隊関係省略）

同十時三十分、連隊長は連隊本部予備隊の第五中隊一小隊を率いて前進、十一時三十分には風波栗高地の西方あん部まで進んだ。このころ第一大隊は李家凹西北方高地の敵と交戦しており、連隊長は渡辺大隊長を励ました。一方、同じころ、三浦第二大隊長からは「快活嶺一帯の敵陣にさえぎられ大隊の前進は困難だ」という報告がはいった。第一、第三大隊方面に比べ、第二大隊の前進が遅れた。このため午後四時ごろ、快活嶺あん部北方に進出してきた第六、第五両中隊を連隊長が直接指揮し、同五時三十分奪取した。山田連隊長は李家凹南方高地向け敗走する敵を射撃中の第五中隊機関銃小隊を指揮中、機関銃に目標を指示したとき右腕を貫通された（次項で詳述）。同六時三十分になって、遅れていた第二大隊も第一線に進出した。一方、右第一線の第三大隊も同五時ラクダ山（コブのある岩山）を奪い、左第一線の第一大隊も同四時雷家山を奪取した。

同七時、山田連隊長は以後の追撃命令を出したあと、軍医や副官のすすめでひとまず後退するハラを決め、第一大隊長渡辺綱彦中佐（度会郡玉城町田丸出身）に連隊長代理を命じた。

この日、師団の攻撃は予想以上に進み、敵を吊橋湾東西の線に圧迫していた。ウ回隊は夕方には犀牛望月の敵陣地東角を占領、左側支隊もまた正午ごろ標高四一一・三高地（洪店西南約二キロ）の敵を破り、洪毛屋基塞方向に追撃していた。

十月一日から十七日までの連隊の損害など次のとおり。

【戦闘参加人馬】将校五八、准士官、下士官兵二七三三、馬七六五【戦死】将校二、准士官以下一三三、馬一一【戦傷】将校一四、准士官以下三二五、馬七。最も損害の大きかったのはやはり第三大隊で六百六十人中、約半分の三百一人が死傷した。また消費した弾薬のおもなものは小銃七万二千発、機関銃九万五千発、手投げ弾二千発を数えた。

坂倉健一中尉

翌十八日も追撃を続ける。午前七時三十分、連隊長代理の渡辺中佐は歩三三作命甲第三九六号を下した。

「第三大隊は標高四五七・六高地に進出後、一部で王家山西側高地の敵を追撃、主力は兵力を老家山付近に集結し、旅団長の直轄たるべし」

午前八時、第一線各大隊は標高五四六・五高地及びその南方高地の敵に攻撃を開始した。右第一線の第三大隊は第十一、第十二中隊を第一線に攻撃したが、本道西側高地の敵から猛烈に射撃され、やっと日没前に

同高地の東北方岩山を奪取した。

中第一線の第二大隊は第五中隊（一小隊欠）を第一線、第八中隊を第二線、第六中隊を予備として午前七時から攻撃を開始した。しかし敵はがん強に抵抗、第五中隊長代理の坂倉健一中尉を失ったが果敢に突撃、夕方五時二十分同高地の西方りょう線を奪取した。また左第一線の第一大隊も第三、第四中隊を第一線として、第二大隊のすぐ左で八時から攻撃を開始、山頂の敵と手投げ弾戦、白兵戦の末午後五時十五分、同高地を占領した。同日連隊は坂倉健一中尉以下九人の戦死と宮崎軍曹以下二十三人の負傷者を出した。

地雷爆発で肝冷やす

――辻分隊　馬捨て重機分解し前進――

追撃命令下る

第二機関銃中隊の分隊長だった辻松兵衛さん（一志郡一志町高岡出身）は、生前追撃戦のもようを次のように語っていた。

辻分隊長は揚家寨守備に当たっていたが十六日第一線に進出、西山占領と同時に追撃に移った。分隊は重機を分解、肩にかつぐと道路沿いに山腹を前進した。馬は大別山にかかる前に捨てており、以後ずっと分解搬送だった。重機の重さは約六十キロ、弾薬箱は約二十二キロ。重機は銃身、脚、前コン（桿）後コンの四つに分解、交代でかつぐ。辻軍曹以下兵たちは腰まで茂る雑木を踏み分けて進んだ。所々にサルスベリがはえており緑の森林をあざやかな茶色の木ハダで色どっていた。辻軍曹はマラリアにかかっていた。四十度の熱にあえぎながらの前進だ。かついだ付属品が肩に食い込む。硝煙の薄れた山の空気が冷たく快か

った。まるで故郷の山林を歩いているような錯覚におちいりかけていた。

分隊は黙々と山腹を進む。部隊主力はずっと後方だ。やがて、辻軍曹は木々の間に三、四本の電線を見つけた。山腹から目の前を横切って道路の方に張られている。(電話線かな?)と思ったので、部下たちに注意して用心深く頭をくぐらせた。ところが、重機の脚をかついで最後尾を歩いてきた弾薬手の倉田明上等兵(津市雲出出身)が脚を電線にひっかけてしまった。(めんどうな)とばかり倉田上等兵は脚をしゃくり取ろうとゆすぶった。その瞬間だ。

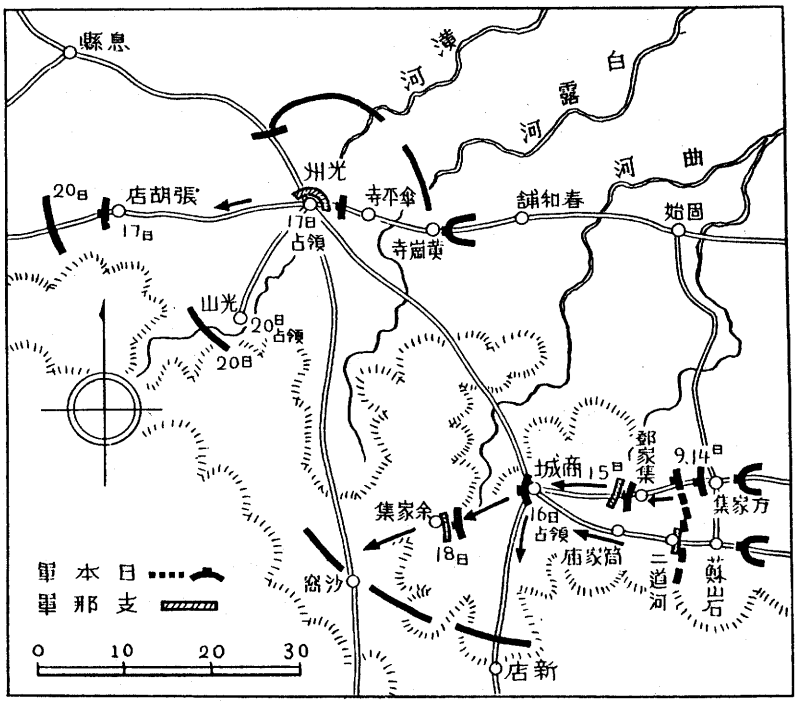
バッガン!

大音響が耳をつんざき、腹をゆすぶった。道路の土砂や、松の木がへし折れて次々吹っ飛んだ。「空爆だ!」兵士たちは口々に叫び、武器をおっぽり出して身を伏せた。樹木で飛行機は見えないが、てっきり爆撃だと思った。爆弾をバラまかれたようなすさまじさだ。衝撃波で、兵たちはしばらく口もきけない。一時間も連続爆撃されたかと思うほど長く感じられた。

やっと〝爆撃〟がおさまると兵たちはもぞもぞからだを起こした。すると倉田上等兵が「おい、おい」と電線を指さしながら「おれが脚で電線をひきちぎったのだ」といった。空爆でなく地雷だったのだ。辻分隊長が電線を目でたどると、自分が身を寄せている岩石に延びており、その岩にスイッチが仕掛けてあった。分隊は道路を避けて命拾いしたわけだが、うっかり道路を通ってきたら全員吹っ飛ばされていただろう。兵士たちは顔を見合わせた。もう日は沈みかかっていた。われに返って大さわぎとなった。さっき放り出した武器は、すっかり山すそに滑り落ちていた。(武器を失ったらコトだ)みんな血まなこになって

探し回った。

敗走する敵にたいし、山田連隊長は自ら指揮をとり、追い撃ちをかけていた。やっと到着した辻分隊は（敵は逃げて行くのだ。うっかり撃って、大きなおつりをもらったら損だ）と壕の中で泥んこになった銃身の手入れをしていた。すると不意に、ゴチンと軍刀で頭をぶたれた「……？」振り向くと連隊長がマユをつりあげて立っていた。「なぜ、撃たぬか！」大カツ一声。「……」やむなく辻分隊長は重機を構え、敵機銃をねらって乱射した。だが案の定、敵はおびただしい機銃弾を返してきた。その一弾が目標を指示していた山田連隊長の右腕を射ち抜いた。さらに、貫通したその敵弾は、ちょうど運んできた弾薬箱を「よいこらしょ」と降



その頃の光州商城方面戦闘配置

ろそうと前かがみになった伊藤上等兵（亀山市出身）の鉄カブト、それもど真中の星章に命中した。幸い星章がへこんだだけで伊藤上等兵は命拾いしたが「連隊長殿を身代わりに立てたようなものだな」とみんなにひやかされた。連隊長は傷にひるまず指揮をとり、夜になってやっと第一大隊長、渡辺綱彦中佐に指揮をゆだねたのだった。このころから戦況はわが方に好転し、郷土部隊の歩兵第三十三連隊は漢口めざし、急追撃に移ったのだった。

辻さんは昭和二年兵。大東亜戦争は護京師団（久居）に召集され、鳥羽で警備中、曹長の階級で終戦となった。植田正三軍曹（久居市庄田）＝無錫東方の戦闘で詳述＝は無二の戦友。伊藤英雄小隊長は中学の同窓。

追撃隊の山田連隊長

さびしく聞いた〝万歳〟

――山川分隊長、偵察で無念の負傷――

清水山の激闘

大別山脈に激闘三十余日。わが郷土部隊はついに一〇三高地一文字山陣地の敵を撃破、最後の決戦を五九二・三高地にいどむことになった。これが〝清水山〟の激戦、文字どおり修羅場の激闘である。

十月十九日。第一線各大隊は標高五九二・三高地、犀牛望月高地一帯の敵を攻撃した。第二大隊は第五、第八中隊を第一線に、山砲及び野砲、また標高五四六・五高地付近の第一大隊から火力の協力を受け午後一時、攻撃前進を開始した。

味方の山と、対峙する敵高地との間はかなりの距離の平たん地で草たけ三十㌢ほどの雑草やイモ畑が広がっている。五九二・三高地（急こうばいで、松が群生）の後ろには小高地が連らなっている。敵は同高地に散兵壕をめぐらす堅固な陣地を構え、たてこもっていた。兵力も相当数の強力な抵抗線と偵察された。

制圧射撃で、敵高地の松の木が次々吹っ飛ぶ。それを小気味よくながめながら、清水操中尉（名張市赤目出身）の率いる第八中隊は敵前七、八百㍍の地点まで前進した。制圧射撃が一段落すると、敵はチェコ機銃、迫撃砲の猛射を返してきた。「撃ちたいだけ撃たせ」清水中隊長は誘導作戦をとった。ここで第三小隊の分隊長、山川清治さん（苑荘、魚台の各項で既述）を長に、兵二人の計三人が先兵となった。中隊主力もすぐあとに続くとの約束で山川分隊長ら先兵三人は敵銃火の中にかけ出した。

チーン

敵のソ撃弾がほおをかすめる。それをぬって左、右に躍進、三十分以上もかかって敵高地のふもとにとりついた。全身、軍服をとおして汗がふき出し、のどはカラカラ、心臓はいまにも破裂しそうに苦しかった。振り返ったが、味方はあとに続いてこない。先兵三人だけが敵陣深く突入してしまったのだ。だがひ

くにもひけない地点だ。

「ともかく敵情を探ろう」山川分隊長は二人の兵を励まし、間隔をおいて左右に広がった。

松の木をしゃへい物にして急こうばいをひそかによじのぼる。いつの間にか左右の僚友の姿を失ってしまった。敵中、まったくの単身偵察である。と散兵壕にぶつかった。敵の気配はない。意を決して、そっとのぞいてみると、壕内はも抜けのから。冷汗をぬぐってその壕を越える。

すぐ上に登った所で第二線目の散兵壕に差しかかる。これも敵の気配がない。さっきの体験で大胆になった山川分隊長は、こんどは何のためらいもなくひょいとのぞいた。「……！」その瞬間の気持ちは筆舌に尽くせない—心臓に冷水を浴びたかのショックだった。壕の中にはずらりと敵兵がひそんでいたのだ。まともに顔をぶち当てた敵兵は十七、八歳ぐらいだろうか。ニヤリと笑ったようだった。次の瞬間、手投げ弾が飛んできた。のけぞるように山腹をすべり落ちる山川分隊長に七個の破片が食らいついた。一片は後頭部に、他は全身に。狙撃されなかったのが幸いだった。松の根っこをタテにじっとひそんだ。

このころになってふもとで味方のときの声があがった。

ダダダ…敵の応射が始まる。最初の喚声はけんせいであった。二度目も。やっと三度目に山をかけあがってきた。待ち構えていた敵の掃射を浴びてバタバタ倒れる戦友。山川分隊長の倒れた地点と主力のかけあがる地点とは少し離れていた。戦友の突撃を〝心細い〟気持ちで見送った。夕方、同高地に日章旗がひるがえり、バンザイのとどろきを、ひとり山すそでさびしく聞いた。先の魚台攻撃同様第一線で奪闘しながら、負傷してバンザイの歓喜を味わえなかった。昭和七年兵。大東亜戦争は二十年に召集され東海軍管

区司令部（名古屋城）に勤務した。

敵に一刀浴びせ絶命

——清水中尉壮烈な戦死——

清水山の激闘

第八中隊は、午後三時ごろ敵の重火線がやや下火になったのを見て、突撃に移った。清水中尉は軍刀をふりかざし、先陣を切って突進、敵陣へおどり込んで敵兵に一太刀を浴びせた。しかしそのとき、ミケンに狙撃弾を受け倒れた。「清水隊長がやられたッ」「隊長殿、しっかりしてくださいッ」抱き起こす部下の叫びに、かすかにうなずいて絶命した。のち、五九二・三高地は、壮烈な最期を遂げた清水中尉の名をとって「清水山」と名づけた。

清水操中隊長

続いて黒田仙之助准尉もやられた（次項）。また大野鉄蔵軍曹、森田喜一軍曹、河合稔上等兵、内海定雄上等兵、矢形末蔵伍長、酒井生郎伍長、西井敬三伍長、鈴木博上等兵らも戦死した。負傷兵もたくさん出た。将校は全滅だった。しかし残った兵は手投げ弾を投げ、銃剣をきらめかせて山頂の敵陣に突入、

ついに午後四時五十分占領した。

標高四五七・六高地を攻撃した第三大隊はがん強な敵にはばまれ、進展をみせなかった。同日戦った敵は、第三十一師に属する約五百人で、死体約四十を残して東南約千㍍の犀牛望月高地方向に退却していった。連隊の損害は戦死清水中尉以下十一人、負傷伍島一男少尉以下三十七人だった。

この夜、十二時過ぎから約八百人の敵が、迫撃砲、機関銃をどんどん撃ち込み逆襲してきた。同高地を確保している第八、第六中隊はこれに応戦、ある者は銃剣を敵の胸に突き刺したまま、またある兵は敵と折り重なって戦死するなど、すさまじい戦闘を展開した。敵は犀牛望月方面から交通壕を利用し、三回にわたって夜襲してきたが守備隊は死守し撃退した。同夜の敵は、すでに青い綿入れの防寒服を着ていた。この服装からこれまで抵抗してきた第三十一師ではなく、新米の第三十師の兵であることがわかった。死体三百を残し、犀牛望月方向へ退却して行った。

軍曹で、第八中隊指揮班にいた津市北丸の内、山本勝太郎さん（七一）は同夜の記憶を次のように語っている。敵はラッパを吹き、手投げ弾を投げては山をのぼってきた。「タマをくれッ」味方の絶叫が各所で起こる。「タマはない、そのままがん張れッ」こんな返事しかできない。鳥羽市出身の元警察官館上等兵が腹をやられて苦もんの末戦死するなど多くの兵が戦傷死した。

「わたしは大東亜戦争は、動員時に虫垂炎手術の経過が悪く補充隊に残され、鳥羽で終戦を迎えた。当時のわたしは軍国主義の第一人者を自負していたものだが、落ち着いて反省してみると、こんなみじめな戦闘は再びくり返したくないとつくづく考え、反戦運動にはいったのですよ」

二十日、左第一線の第一大隊は右から第二、第四中隊を第一線とし、午前十時三十分から犀牛望月高地の敵を攻撃したが、奮起の敵にはばまれ日没となった。右第一線の第二大隊は、火力をもって第一大隊の攻撃に協力したが、ほとんど幹部を失ったうえ、兵力も一中隊平均四、五十人に過ぎぬ状況で犀牛望月最高峰を奪取できず戦闘を中止した。同日は戦死西野伍長以下十五人、負傷森田准尉以下三十七人だった。

虫の息で『君が代』歌う

――黒田准尉、鬼神も泣く最期――

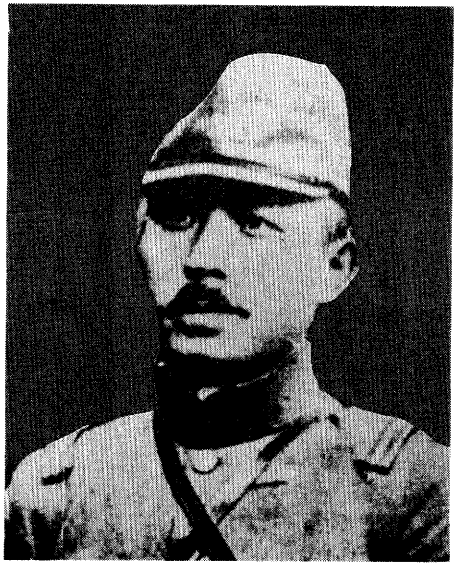
清水山の激闘

五九二・三高地の激戦で、壮烈な白兵戦の末に傷つき、りっぱな最期をとげた第八中隊の黒田仙之助准尉（員弁郡藤原町出身）の死を見届けたのは第十六師団今村衛生部隊の中隊長、山野明男さん（八四）＝久居市新町＝だった。

清水操中隊長（名張市出身）を失った将兵は怒りに燃え、しゃにむに敵陣に突っ込んだ。日本刀を振りかざし、真っ先に敵壕内におどり込んだ黒田准尉、そのすさまじい気迫と形相の前に、敵は浮き足立った。だが、黒田准尉に続く部下はわずか三人、これを見た敵はきびすを返し、約百の兵力を頼って逆襲に出た。百対三ではいかに勇敢な黒田准尉とはいえかなわなかった。しかし一歩も退かず奮戦したが、ついに敵手投げ弾の前に、朱に染まってのけぞった。中隊指揮班の山本勝太郎軍曹がかけ寄ると「刀を拾ってくれっ」と絶叫した。傷は手投げ弾の破片で腰の骨が折れ、ぼうこうを圧迫しているようす。包帯ホウが三つ、ど

ぼっとはいってしまう重傷だった。

黒田准尉はタンカで約一キロ後方、沙窩の野戦病院に運び込まれた。谷間にある同野戦病院には第十六師団、第三十旅団各司令部も同居していた。同病院には包帯で手をつった山田連隊長（先の一文字山陣地で負傷）はじめ第二中隊長野田巳一中尉（久居市出身）間柄馨中尉（松阪市山室）ら負傷した将兵も入院していた。約二百人の患者が入院手当て中だったが、そのほとんどが大別山の戦闘で傷ついた第三十三連隊の将兵だった。



黒田仙之助准尉

黒田准尉は敵手投げ弾の破片で太ももをえぐり取られ、出血がひどかった。だが、呼吸ひとつ乱さず、見舞いに訪れた山田連隊長に元気に答えた。重傷の黒田准尉は個室（民家）で手当てされ、竹製の寝台（南京虫を防ぐため中支付近の寝台はみな竹製）に寝かされていた。山野衛生中隊長とは久居の連隊当時から起居をともにした間だった。

五、六時間たった。黒田准尉の容態が変わってきた。「山野よ、いろいろ世話になった。枕を東の方へ変えてくれ、起こしてくれ――」付き添っているのは山野中隊長と負傷時から一睡もせず看護している岡田太郎上等兵の二人だった。「しっかりせよ」と山野中隊長。ベッドの上に起きあがった黒田准尉は正座する

と「君が代は、千代に八千代に、さざれ石の…」とうたい始めた。「……コケのむーすうまーで…」最後まではっきり歌い終わると「天皇陛下バンザイ」を三唱、同時にがっくり倒れた。すでに呼吸はなかった。〝帝国陸軍〟の武将らしい、りっぱな最後だった。「クロダ！」山野中隊長は黒田准尉の手を握り、ポロポロ涙を流した。（いい男だった）惜しい男を失った。

当時の山野明男中隊長

ふだんはおとなしいが、ひとたび戦闘となると豪胆だった。—民家の窓から流れ込む大陸の冷たい夜気が、黒田准尉を包みはじめた。昭和十三年十月十九日夜のことであった。

山野さんは大正十一年兵、大東亜戦争は昭和十七年から満州へ、終戦まで二十三年間軍隊のメシを食った人。

足首に鉄鎖つなぐ

——敵陣日本軍に必死の抵抗——

追撃戦

軍は追撃作戦に移っていた。

十月二十日午前十時、右第一大隊第二川村中隊と第四中隊は犀牛望月高地の攻撃命令を受けた。この高地は十九日占領した清水山の稜線続きで南北に横たわる長い峰の山で南端の最高地より西方に直角に稜線

が伸びている。

第二、四中隊は谷川ぞいに、あるいは急峻な崖をよじ登り、約一時間ぐらいで当地の麓に着いた。地形は雑木林で高地付近は木一本なく、壕を掘った新しい土が見える。見通しが悪く、油断が出来ない。警戒しながら高地に向かって前進すると突然右方斜面の雑木林からチェコ銃の連続猛射を受けた。おそらく重機二個だろう。極力銃座の位置を探したが全く不明。夕方近くになってやっと敵の位置が判明したが日は暮れかかっていた。突撃は翌日と決め、大隊本部から差し入れの握りめしを分け合ってその場で夜明けを待った。

敵の右銃座と大隊砲射撃、発煙隊の協力を得て、二十一日正午過ぎ、最高峰を占領した。

この戦闘で第二川村中隊の第二小隊長代理、川村万太郎軍曹（四日市市広永）は最後の白煙弾にまぎれて敵の逃げはらった敵銃座から脱兎のごとき勢いで、

「ワァーッ」

文字通り弾雨を冒して追撃

と喚声をあげて突進した。

敗走する敵に追い撃ちをかけること数分間……。

ヒュルヒュルヒュル

弾道音と同時に猛烈な迫撃砲弾がとんでくる、さく裂音で耳が遠くなりそうだ。みな壕内に身をひそめる。さいわいに壕内でのさく裂はなかった。

高地には銃座とタコツボ数個、稜線には深さ一㍍三十ぐらいの交通路が左右約七十㍍ほど構築されていた。

今の川村万太郎軍曹

敵は死体十数名を残して後退していった。高地付近で抵抗した敵は直系軍の二百人ぐらいだったが壕内にクイに鉄鎖で足首を縛られていた兵隊が数人いた。日本軍の急進撃を阻止するための手段だ。

高地は占領したが、間をおいて小銃弾が飛んでくるので稜線の両端に銃座を作って夜明けを待った。敵は予想通り北方から逆襲してきたが、撃退した。

「漢口攻略を目前にしたこの戦闘で水越甚一軍曹をなくしたのは残念でした。この戦闘も激烈で、川村軍曹の突撃のもようはすざまじく、いまでもありありと瞼に浮かんできます。このあと漢口へ向けて追撃するのですが、これが筆舌に尽くしがたい難行軍で、それに耐えきれず途中で倒れてしまった兵もありました」と、川村可夫さん（七〇）＝一志郡嬉野町宮古＝は当時を回想している。

またこの日の夕方、師団の右翼隊として麻城街道の西側にそびえる白雲山の堅陣に対し、一週間にわた

り猛攻を続けていた歩兵第三十八連隊は、ようやく同山の八合目付近に到達、白い秋雲をまとう山腹に砲声が轟いていた。

南へ南へ戦火を拡大

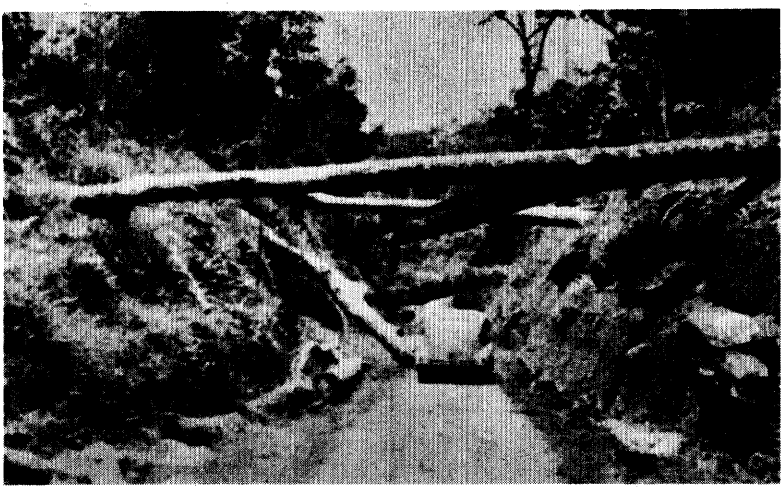
――敵ついに大別山を捨てる――

追撃戦

大別山をめぐる攻防の帰趨はようやくはっきりしてきた。

戦局は、がぜん日本軍に有利に傾いた。連隊は翌二十二日も南方に追撃を続け老屋山、沈上南側高地の敵を攻撃（戦死草川上等兵、戦傷松村一等兵以下七人）第十師団の一部はすでに省境を突破、第十三師団も将軍塞を占領した。二十三日も午前八時半から攻撃、老屋山南方高地を確保して、敵の退路を遮断（負傷、広田軍曹以下五人）二十四日払暁から、敵は四十日間にわたって死守した大別山の堅陣を捨て、麻城街道を南へ敗走し始めた。これを追って連隊は、同日午前九時には陶家山南側高地を奪い、りょう線に沿って前進、午後一時には両路口（ふたつぐち）に出た。このころ、それまで進出の遅れていた右側支隊主力も前進してきた。また第三十八連隊第二大隊と旅団司令部は麻城向け先発した。（省境突破）

夜間も追撃を続け、連隊は二十五日午前二時には両路口南々西三十キロの楊柳樹まで進出した。九月十八日攻撃開始から約一ヵ月間、大別山の堅陣、強敵と死闘を展開した連隊は、ついに麻城街道に出た。大別山突破作戦は、ついに終止符を打ったのだ。めざすは漢口である。本道に出ると、もう友軍の車両と将兵



敵敗走時に妨害の置き土産

であふれていた。長い長い隊列である。

二十五日、連隊は雨にけぶる麻城を過ぎた。麻城は、武漢三鎮の東北方にあり、漢口へ通じる要衝だ。この日夜、将兵は〝漢口陥落〟の報を聞いた。揚子江沿いに進攻を続ける第十一軍方面で、武漢三鎮を守る最後の関門「田家鎮」を抜いて猛攻中の第六師団が、この日漢口東端の租界に踏み込んだのであった。前にも述べたが、地形は最悪の条件、対する敵は闘志、武装ともに最もすぐれた直系軍という。戦場の分担で貧乏クジを引かされた連隊（第十三、第十六師団）は、漢口一番乗りを他部隊に譲らなければならなかったのだ。将兵はがっかりした。続いて翌二十六日には、武昌、二十七日には漢陽も落ち、武漢三鎮は完全に日本軍の手中に帰した。内地では、旗行列やチョウチン行列が行われ、勝利にわいたものだった。

連隊は、また強行軍が始まった。飯をたく間だけが休みの、昼も夜もない行軍。一ヵ月余の死闘の疲労とマラリア、下痢患者の発生で落後者も出た。眠りながら歩いた。逃げ遅れた

敵兵がまぎれ込み、並んで歩く夜もあるほどだった。将兵は〝死の行軍〟といった。

話は前後するが、二十六日宗埠（そうふ）を過ぎ、二十七日には河口鎮に着いた。ここから第二大隊は夏店の守備に着くことになり再び一日四十キロの強行軍を続け二十九日に着任した。連隊主力は京漢線の要衝・広水付近の残敵掃討に向かったが、途中旅団の守備区域の変更によって再び河口鎮に引き返し、十一月四日宗埠の守備を命じられ、漢口に入城したのは十二日だった。しかし漢口には駐屯せず、そのまま対岸の漢陽付近の警備に着いた。

第十章　漢　口　入　城

夢にも見た漢口入城

——住民らが治安維持会を——

漢川の警備

追撃、追撃の苦しい行軍を続ける連隊（主力）は、十一月十二日待望の漢口（ハン・カオ）へ入城した。漢口は華中を貫流する揚子江をさかのぼること一千キロの左岸にあり、対岸の武昌、漢水を隔てた漢陽の三都で、いわゆる武漢三鎮は揚子江を通じて上海四川の宝庫と下流上海とを結ぶ中国の心蔵部であり、事変前の人口は百万といわれていた。連隊が入城したころの漢口は、まだ戦火の跡も生々しく日本租界の建物は見るもむざんに破壊されていた。しかし戦火を浴びているとはいえ、市街の威容は、将兵の目を見張らせるものだった。漢口入城—将兵はこの日を夢に見て奮闘してきたのだった。ところが、連隊はここに駐屯せず、そのまま対岸の漢陽へ進み、同地付近の警備についた。漢陽は人口数十万、付近一帯は工業地で有名な漢陽鉄廠（てっしょう）があった。南方にそびえるのは、かの大別山。

十二月にはいって、こんどは漢川付近に移動した。連隊本部と第一大隊は、漢水を船でさかのぼり、六

日漢川へ入城、警備についた。一方、主力とは別に、十月二十九日河口鎮から夏店（かてん）にはいり警備についていた第二大隊は、岐定（ぎてい）宗埠（そうふ）と順次移動、十二月はじめには京漢線の要衝、漢口西北方八十キロの孝感に駐とんした。師団司令部もここに置かれていた。大隊は孝感駅近くにある支那軍兵舎跡を宿舎にあて、同駅と四、五キロ離れた城内警備に当たった。宿舎のまわりにはクリークが流れており、楊柳も茂っているなど環境はよかったが、南京虫には手をやいた。こうして正月を迎えた。

また一方、第三大隊は漢川のやや下流にある蔡甸（さいてん）に本部を置き、第九中隊だけを本部から八、九キロ離れた黄陵磯（こうりょうき）に配置警備と宣ぶ工作の任務を続けた。このころ黄陵磯には武漢攻略戦に参加した同じ郷土の歩兵第百三十三連隊もいた。その記述は同連隊の項に譲ることにしよう。

連隊本部を置いた漢川は漢陽から漢水を約五十キロのぼった所。城壁のある、戸数四、五百の町、戦火も受けておらず、物資の集散地としてにぎわっていた。本部は大きな民家に設置、すぐ宣ぶ工作を始めたが、住民はわりあいに親日的で、治安維持会をつくるなど平穏。時たま〝敗残兵出没〟の情報がはいり、そのつど小部隊を出動させたが、敵影はなく、一発も撃たずに帰ってくることがほとんどだった。そのまま昭和十四年の元日を迎えた。華北に上陸以来、大陸で迎える二度目の春である。午前十時から、各中隊ごとに年賀式をあげ、東天をよう拝、スルメ、酒の下給品で内地の正月をしのんだ。

一月十五日、連隊副官の大島藤吉少佐が戦病死した。愛知県出身、守山時代からはえぬきの人だった。後任には第二機関銃中隊長、島田勝巳大尉（津市大谷町出身）が決り、孝感から着任した。島田大尉の後任には、負傷がいえて復帰した第一機関銃中隊長の広七郎中尉（伊勢市上野町）が就任した。大島少佐の

追撃もまた苦しい、早くパンパンやってくれと願うこころもある

追撃になるとどこにこれだけの兵がいたのかと思う位である

追撃中のわが連隊

遺骨は、内地帰還のため、将校の胸に抱かれ、本部から船着き場までの道を行進した。これを見た住民が道ばたに集まり、祝典と間違えて爆竹をポンポン鳴らした。山田連隊長が、烈火のごとく怒って住民を追っぱらったのはもちろんである。

こうして二月十一日、第三十三連隊に天門への移動命令が下った。連隊本部は十四日出発、続いて第二、三大隊もそれぞれ守備地をたち、天門へ向け行軍を開始した。

歩哨でつい居眠り

――井東上等兵、〝銃殺刑〟逃れる――

漢川の警備

連隊砲中隊の上等兵、井東末光さん（伊勢市岩淵町出身）の失敗談である。

漢陽に進駐した連隊砲中隊は宿舎も決り、砲廠（ほうしょう）には手入れのゆきとどいた四一式山砲、弾薬、弾薬車などが整理され納められた。そこで砲廠には歩哨（ほし

ょう）が立つことになった。

いく日かあと、井東上等兵にも歩哨（見張り兵）勤務の番が回ってきた。上番したのがきのう午前八時、砲廠の歩哨と中隊衛兵の兼番だった。井東上等兵は砲廠の三番歩哨、つまり兵隊用語の〝けつ立〟で一番最後に立哨番が回ってくる。下番する一番最後の、朝七時から八時までの一時間が何回目かの立哨時間だった。

昨夜からの立哨でなにしろ眠い。戦闘中なら緊張しているが占領後の市内のど真ん中。しかも中隊兵舎の裏に当たるから敵はもちろん、中隊の兵隊さえも用のない砲廠の哨兵である。そのうえのどかな初冬の朝だった。暖かい陽光がぽかぽか井東上等兵の肩に降りそそぐ。

砲廠の前庭は百六十五平方㍍（約五十坪）ぐらいの草原で、両側は中国独特の土べいで囲まれ、門は開きっぱなしだ。広場の中央には、野天井戸（中国特有の井戸ガワのない）がひとつある。その井戸のまわりは、兵隊が水をくむため水たまりになっていた。

両側の土べいには中国ガワラがふいてあり、その上にたくさんのスズメが一列に並んで止まり、日光浴をしている。

井東上等兵はふと郷愁をおぼえた。スズメは二、三羽ずつ舞い降りると井戸端の水たまりでピチャピチャ水浴びをし、再び土べいの上に舞い戻っていくと、別の二、三羽がまた舞い降りてきては水浴びをする。こんなのどかな風景をぼんやり眺めているうち井東上等兵は立ったままうつらうつらし始めた。

ものの気配にハッと気がつくと、まずスズメが水遊びをしていた水たまりに、将校の黒い長グツが立っ

歩哨生活一忙中閑あり洗濯である

ているのを見た。（しまった！）と冷や汗をおさえ、長靴からズボン、ズボンから上衣と恐る恐る目をあげていくと、なんと八字ヒゲの山田喜蔵連隊長だ。あわててささげ銃の敬礼をし「立哨中異常ありませんッ」だが、連隊長は答礼をしてくれないのである。捧銃はそのままだ。やおら連隊長「歩哨、お前は眠っていたのか」「いいえ…。眠ってはおりませんッ」「連隊長がきたのをお前は気がつかなかったではないか」「はッ、スズメの水浴びを見ていたのであります」

「ふむ」

八字ヒゲをしごいた連隊長「中隊長に、わしの所にくるよう伝えろ」「ハイッ」さあ、たいへんだ。すぐ衛兵司令部の佐野伍長に報告すると、司令はこのむね安田治中隊長（亀山市天神町）に伝えた。

（こうなっては…）とハラを決めた井東上等兵、下番すると毛布をかぶって昼までぐうぐう高いびきをきめ込んでしまった。さてその日は何ごともなくすんだ。あくる日夕食に酒が出た。井東上等兵、例のことなど忘れ、いっぱいきげんの

鼻歌でいると、さあ中隊長から呼び出しだ。しかたなく中隊長室にはいって行くと、安田中隊長「井東、貴様ほんとうは眠っていたのだろう。おれは、おかげで連隊長の前で不動の姿勢三十分、さんざんしぼられてきたぞ。貴様、銃殺になるところをおれがもらいさげてやったのだ。おれにはほんとうのことをいえ。どうだ」いわれるまでもなく、敵前歩哨の居眠りは、陣中において当然銃殺刑ものだった。中隊長のことばにうれしいやら、ほっと胸をなでおろした井東上等兵だが、ここでうっかりドロを吐いて銃殺にでもなったらたいへんだ。井東上等兵はがん張った。「ほんとうにスズメの水浴びを見ていたのでありますッ」安田中隊長はにが笑いするだけであった—。

それから数日後、砲廠歩哨の特別守則の末尾に次の一条が加えられた。いわく〝立哨中スズメの水浴びを見てはならない〟

井東さんは昭和九年兵。十八年再び応召、第六野戦補充隊歩兵第一大隊でタイへ、二十年二月独立混成第二十四旅団に替わってビルマへ、モールメンで終戦。通算六十余回の戦闘に従事。抑留生活一年半ののちに復員。家族は妻、奈津子さん。

戦場をはせる親心

——太田中隊長、償勤兵の更生に努力——

漢川の警備

大別山の戦いで、手投げ弾に傷ついた第九中隊長、太田雄三さん（八九）＝津市船頭町＝は六合、南京を

経て上海に着き、深谷部隊で診療を受けてそのまま上海病院に入り、一ヵ月間療養することになった。傷の回復経過はよかったが病院は「太田君、内地に帰ってゆっくり休めよ。いい機会じゃないか」とすすめる。だが太田中隊長は「戦線に残してきた部下の安否を知るまでは—」と首を左右に振り、病院の黒板に書き出される退院者名の中から、毎日「太田」の名を消し続けた。やっと退院すると、からだをならすため同地の練成隊に放り込まれ訓練だ。これをきらった太田中隊長は毎夜飲み歩いては「早く第一線に帰せ」「むちゃするなよ、太田」「許可しないと逃げだすぞ」と、練成隊副官と押し問答、とうとう四日目に第一線復帰を認めさせた。

一刻も早く部下のところへ—南京にいる師団では中隊の現在位置を聞いたが便りがない。やっと一週間後、内地から徴発されたポンポン船で九江、漢川を経て連隊に帰った。上田孝大隊長は「太田、よく帰ってきてくれた」と大喜び、歓迎のごちそうを用意してくれた。

「大隊長殿、自分の中隊は？」

「黄陵磯（こうりょうき）の警備だ。重要地点だからしっかりやってくれ」

黄陵磯の中隊に帰って太田さんは驚いた。大別山の戦闘をはじめ、数々の苦戦で下士官も替わり、兵は半分も顔を知らぬものばかり。警備体制も気に入らない。しかしともかく警備指令官宿舎に入った。

宿舎は当時の三井物産の取り引き商社の倉庫で立派なもの。漢口作戦が一段落したあとで食糧は漢口からトラックでどんどん運び込まれ、たっぷりある。衛生管理も行き届き、重機も完備されているが、水だけが悪い。時どき八キロ程離れた部落に討伐に出る程度でのん気な所だ。十二月末（十三年）に着任して翌

二月ごろまで踏みとどまることになった。

黄陵磯に着任する際、上田大隊長から「お前の隊に償勤兵がいるから、めんどうをみてやってくれ」といわれていた。補充隊として内地から送られてきた前科三犯、土工、S二等兵（志摩出身）だ。Sは酒ぐせが悪く、バクチ、けんかの前科を自慢して兵隊に乱暴する。太田中隊長は司令室にSを呼んだ。

「お前は酒が好きか」

「はい、大好きです」

「そうか、おれも大好きだ、まあ飲め」

はじめは上目づかいにおそるおそる飲んでいたS、酔いが回るにつれ、シャバでの喧嘩話を夢中になってやりだした。「バカ者！大げさに言うな。いいか、酒が好きなら飲ましてやる、ただしおれの前で飲むのだぞ」

太田中隊長はきつく言い渡した。しばらく司令班に置いて目をつけているとおとなしい。動物をかわいがる。行軍で同僚が苦しんでいると銃三丁、背のうを担いでやって平気な顔をしている。「もうよかろう」と小隊へ返すと、またぞろ酒を飲んで小隊長に乱暴、営倉に放り込まれてしまった。

太田中隊長は、Sは気が小さいだけで、酒が悪い、乱暴な性格をなんとか直してやりたいと思って営倉を訪れた。

「Sよ。お前はなぜ乱暴するのだ」

「……」

「お前の弟は海軍で活躍しているそうじゃないか」
「はい、弟から兄さんが心配だという手紙がたびたび来ます」
「そうだろう、弟にはずかしくないか」
太田中隊長はこんこんとさとした。Sは涙をポロポロとこぼして改心を約束した。だが営倉をだすと元のモクアミ、中国人を殺した。
二月のはじめ、八路軍討伐の命令が出た。大陸は奥地に向かって行軍を続け、六月ごろには雲夢（うんむ）にはいった。出発以来Sはどうやらおとなしくついてきたが雲夢で夜酒を飲み、中国人に乱暴しているところを、とうとう巡察将校に見つかってしまった。
巡察将校に見つかってはしかたなかった。
「貴様の隊はどこか」
「はい……。太田中隊であります」
「よし。中隊長の所まで行こう」
「……」（ほかのやつらはおれにおびえているが、太田だけは怖い）
S二等兵は腕をとろうとする将校から逃がれようと身をもがいた。そのはずみで将校の軍刀に手が触れた。運悪く軍刀はするりとサヤをすべり、将校の手のひらを切った。こうなってはウチワごとではすまされなくなった。顔色を変えた将校は震えるSを引っ立てて太田中隊長の所へ乗り込んできた。
〝穏便にすませてやれ〟との声もあったが、太田中隊長は「いや、戦地だからといって、でたらめは許

武漢へ武漢へ　追撃、追撃、足のマメもマラリアもなんのその

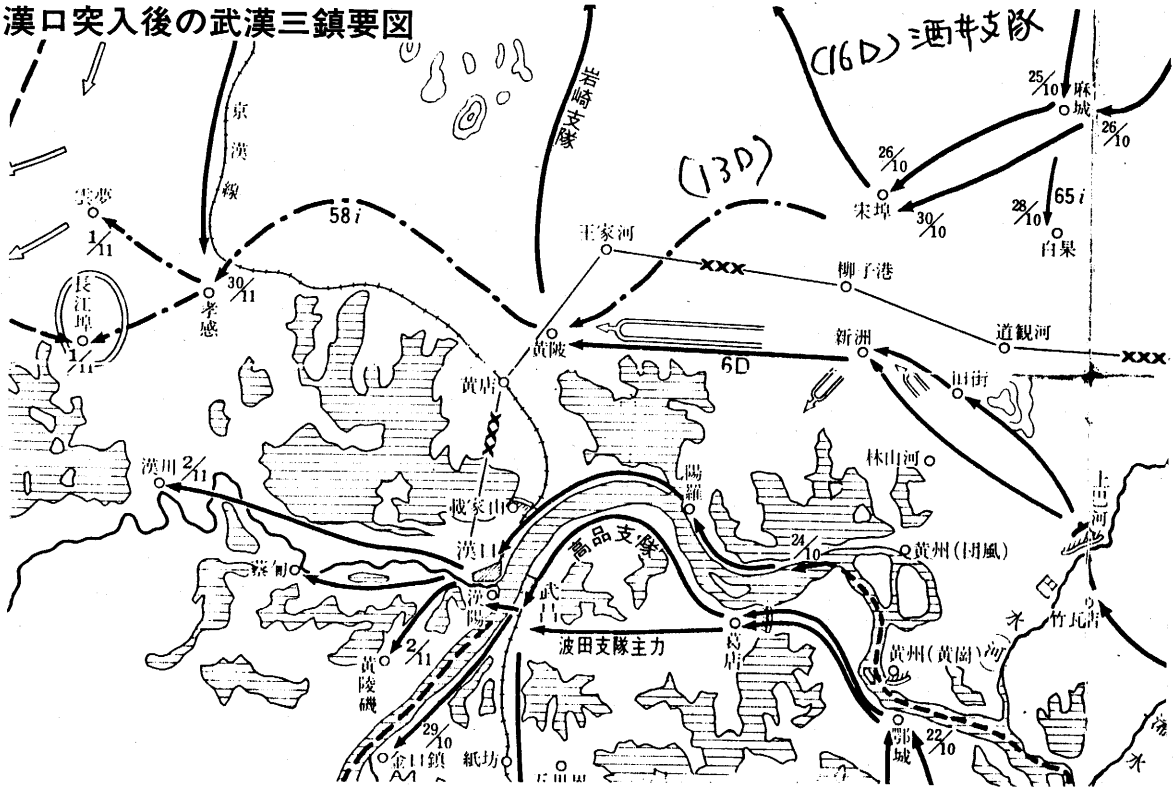
せない」とSを軍法会議に送った。だがSの身柄を送るとき、太田中隊長は「Sはふだんは人情の厚い兵だが、酒が悪いのだ」と、行軍に苦しむ同僚の銃を背負ってやった事実などを書き添えてやった。このため寛大な措置がとられ、当然十年の刑が科せられるところを、二年の懲役ですんだ。「中隊長殿の口添えで命拾いしました。以後、乱暴をくり返さないことを誓います」Sからこんな感謝の手紙が届いたが、その後の消息はわからない。

太田さんは在郷軍人会津市連合分会第二分会長（橋内）のころ、十二年十一月召集、千種で将校教育を受けたあと野戦に出た。家族は妻、好子さんと二男六女。

○　○　○

漢川駐屯中〝医は仁術〟をつくした第一大隊付衛生准尉、山崎仁さん（熊野市大泊町出身）の思い出話。山崎さんは渡辺正、小倉勝也両軍医少尉らと宣ぶ班をつくり、現地人に施療を行った。彼らは「イーカン（医者）、イーカン」と集まってきて、聴診器をもの珍しそうに眺めた。聴診器をあてて診

漢口突入後の武漢三鎮要図



察してもらうのが初めての連中ばかりなのだ。ある日、通訳がきて「お産で困っているから見てほしい」と呼びにきた。「よし、よし」と山崎准尉が行ってみると、三十歳前後の女が縁側に足をダラリとたらして苦しんでいる。彼女の顔は真っ青。診察を始めようと女の前に立ってギョッとした。赤ん坊の片足が、にゅっと飛び出している。しかもその足はすでに腐り始めているではないか。難産、しかも一週間もほうりっ放しのままだという。「ふむっ」さすがの山崎准尉もうなった。だが、自分の全能力をしぼってこの女を助けなければならない。急いでゴム手袋をはめると「赤ん坊は死んでいるが、君の生命だけは助けてみせる。安心するがよい」と励ました。幸い無事に死児を引きずり出すことができた。「十日間くらいは絶対動いちゃいけないよ」と言い聞かせると、女は目にいっぱい涙をため、何度もうなずいて見せた。

二週間ほどたつと「春風たいとう」と書いたノボリを先頭に、大きなブタ肉とカゴに山盛りのチータン（卵）を持って、総出で礼にきた。もちろん例の女の微笑が先頭にあった。「よかった、よかった」山崎准尉は、実際ほっとして、同時に自分のことのようにヒゲづらをほころばせて喜んだ。「敵味方の区別なく、万国赤十字条にのっとって看護するという任務を果たした……これは胸を張っていえます」と回想。

敵け散らし、すぐ退散

――中国軍を包囲、せん滅へ――

襄東会戦

漢川付近の警備に当たっていた連隊に天門への転進命令が下ったのは二月十一日。十四日まで連隊本部

が出発、続いて各警備隊もそれぞれの守備地をたち、天門めざして行軍を開始した。運河長江埠（ちょうこうふ）へ出て、天門道を進軍した。（十七日に郎君橋着）このころ、連日の降雨で道はぬかるみと化し、行軍は困難をきわめた。車両部隊の配属を断わったほどだった。柳河に到着したとき、天門はすでに独立歩兵大隊によって占領されており、二十二日に難なく入城、ここを根拠地として付近の掃討に当たることになった。

二十三日、約四十キロ離れた岳口鎮（がくこうちん）に二百余の敵兵がいるのを察知した第三大隊が出動、新堰口市付近で約四百の敵と出会い、これを退撃し夕刻には岳口鎮を占領、一部を守備に残し、二十四日天門に引き返した。

二十八日、またも新堰口付近に敗残兵が出没したため海軍と協力して掃討、天門―岳口鎮間の連絡拠点とした。以後天門に連隊本部を置き、付近の警備についていたが、官橋舗（かんきょうほ）への移動を命じられ、三月十八日移動した。

○　○　○

このころ、軍は襄東（じょうとう）会戦を企図し、着々と準備を進めていた。武漢三鎮、広東は陥落したが、平和の訪れる気配はなかった。前年、つまり十三年五月に成立した近衛改造内閣は、国民政府の遷都先、武漢三鎮と華南の中心地広東の攻略によって戦局の結末をつけるつもりだった。そして攻略は成った。中国の主要な商工業の中心都市はすべて日本の占領下に下り、海上交通は遮断され、中国は確かに大きな打撃を受けた。しかし屈服はしなかった。

一方、日本軍の進攻作戦は武漢、広東攻略で限界に達した。この伸び切った戦線の背後では絶え間なく八路軍、新四軍などと遊撃戦をくり返さなければならず、「点と線」を維持するので手いっぱい、これ以上の大作戦をすすめる兵力の余裕はもはやなくなった。中国共産党の毛沢東はいまや日本の戦略的進攻、中国の戦略的防御という第一段階は終わり、戦略対峙の第二段階、つまり日本の戦略的保守、中国の反攻準備の時期に入ったと論じた。そのとおりだった。以後七年間の中国との戦争も、伸び切った戦線の維持と占領地内のゲリラ戦に追い回されただけだった。（参考「持久戦論」―遠山茂樹ほか「昭和史」岩波書店）

武漢三鎮を捨てた中国軍は河南、湖北両省の要衝に集結し、反撃の機をねらっていた。漢水を境に東側地区を襄東、西側一帯を襄西と呼んでいた。敵は襄陽に作戦本部をおき、この地方に総指揮官李宗のもと第五十七師団四十万の大軍を配し、山岳部や大小支流を利用した要害陣地にたてこもっていた。その戦略体制は、四川省、つまり重慶防衛の第一線をなすとともに武漢三鎮を西と北から圧迫する形をとっていた。

これら日本軍をおびやかす敵を一気にけ散らし、すぐ引き返すという電撃作戦が襄東会戦であった。作戦期間は大体四月十八日から五月二十二日まで（十六師団）で、わが第十六師団はじめ第三、第十三師団と騎兵第四旅団が参加、八方分かれて襄陽、そう陽方面の中国軍を包囲、せん滅しようというものだった。

第十六師団は五月五日、官橋舗、安陸付近にその兵力を集結した。このころ早くも行動を起こした北方軍の一隊は京漢線の碓山付近の敵をけ散らし、五日には襄陽を席巻、七日には比源に迫っていた。また一部隊は信陽から西新集に進出して敵北方軍の背後を突き、また一方では中央軍が大別、大洪の両地深くまで敵を追っていた。わが師団は第十九旅団を第一線とし、第三十三連隊を予備隊にして進撃を開始した。

山田連隊長が〝戦死〟

――佐賀の銘酒、霊前に供える――

襄東会戦

襄東会戦では第三十三連隊は終始予備隊として行動したので、戦闘らしい戦闘もなく、損害も戦死三、戦傷十を数えたに過ぎなかった。行動のあらましだけを述べておこう。

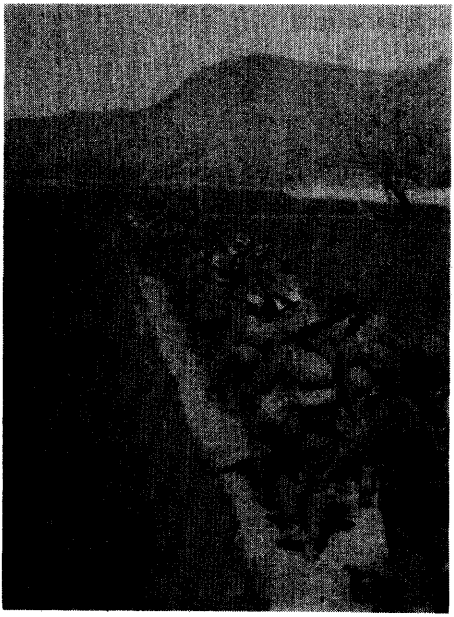
戦闘間は鬼神も泣く山田連隊長の童顔

連隊は守備地の官橋舗を出発し、安陸に到着した。安陸では、すでに先進の第十九旅団が、兵力を集結しており、ここで第十六師団の集結が完了、第十九旅団を先発として襄陽に進撃を開始した。連隊は予備隊だが、将兵は食糧も弾薬も持てるだけ持つという重装備で行軍した。くる日も、くる日も、昼も夜もの強行軍が続いた。五月のなかばだが〝漢口雀落（かんこうじゃらく）の暑熱〟―屋根のスズメもころがり落ちる―といわれる地方だけに、日ましにつのる暑さには参った。風もない。水筒はたちまちカラになった。ドロ水をすすって、わずかにかわきをいやす。早

朝出発しては二十五キロから三十五キロを歩く。部落に着くと、わずかの睡眠をとってまた夜行軍に移る。こうして汗とほこりの進軍を続け、十一日に湖陽鎮（こようちん）に着いた。

そして十二日未明、第二十二代の連隊長、山田喜蔵大佐（佐賀県出身）は〝戦死〟した。第九中隊長だった太田雄三さん（津市船頭町県営アパート）は、同夜のもようを次のように語っている。「ムシの知らせというのでしょうか、その前日夕方、連隊長は自ら軍旗を持って到着する兵を出迎えた。おかしいぞと思ったものでした。飲み友だちといえば失礼だが、連隊長はわたしを相手によく酒を飲んだ。その夜もわたしと飲み『太田、そのうちに佐賀の銘酒〝富の寿〟を飲ませてやるからな』と笑っておられた。明け方、急死を知らされ、驚きました。大別山以来の激務続きがこたえたのでしょう。富の寿二本は死後に内地から届いたものらしく、雲夢で行われた慰霊祭の霊前に供えられ、将兵の涙を誘ったものでした」

明け方から連隊は出発した。第二大隊長、三浦中佐が指揮をとっており、連隊長の姿が見えないので将兵は不審に思ったが、事情を知らぬまま行軍を続け、次の部落に到着して初めて連隊長の死を知ったのだった。遺体はダビにふされ、連隊副



急追進撃の苦しさ

官の島田勝巳大尉（津市出身、故人）らに守られ、その夜遅く本隊へ追及した。戦死と公表されたため内地では〝連隊長が戦死するくらいだから、三三は大きな戦闘をやったのだろう。全滅したのではないだろうか〟と心配したものだった。

その日、湖陽鎮を出発した連隊は炎天下を四十八、九キロも歩き双家鎮に到着、十三日は休養が与えられた。このころ襄東会戦も終わろうとしていた。連隊は双家鎮で反転し、十四日再び湖陽鎮へ戻り、そこから棗陽（そうよう）―平氏―桐柏（どうはく）―随県と転進、二十六日は再び官橋舗に帰ったのであった。師団司令部も、自動車で徳安に到着した。そのころから、将兵の間に内地帰還のうわさが流れ始めた。

〝銃が重いから〟捨てる

――太田中隊長、初めて部下にビンタ――

雲夢へ集結

襄東作戦の任務を終えた連隊は五月末再び官橋舗へ集結したのち雲夢（うんむ）への移動を開始した。第一中隊本部指揮班長だった松田雅胤さんの日記をもう一度紹介しよう。（カッコ内は担当記者注）

5月25日　晴れ。八時に義堂鎮出発、雲夢に向かう。行軍行程約八キロにして雲夢に到着、同地にて連隊本部到着までしばらく休養出来る予定（そのころ中国大陸も田植のシーズン、忙しそうな農夫を見て故郷の父を思う兵士も多かった）

6月1日　曇り。七時起床、新任連隊長、歩兵大佐、横田豊一郎殿着任さる。

横田大佐は陸軍経理学校生徒隊長から二十九日到着、十五年十二月一日付で支那派遣軍総司令部付に栄転するまで第三十三連隊長をつとめた。横田さん（池田市出身）は「日露戦争で奉天会戦・三軒屋付近の戦争は軍内の周知のところ、しかも支那事変においては南京攻略に偉功をたてた部隊の軍旗を奉ずることは、身に余る光栄と感激した。同時にこの栄誉を汚さざるの重責を在任中日夜けんけんふくようせんことを誓いました」と話していた。

新任連隊長横田喜蔵大佐

同2日　晴れ、七時起床、点呼と遙拝。十時三十分より東関広場において新連隊長着任のあいさつ、十一時落後せし中隊長広岡中尉以下二十六人中隊に復帰せり。（雲夢は城壁をめぐらした町、周辺の物資集散地で毎朝野菜市が立つなど平和なところ、住民の親日感情もよく、治安維持会もつくられていた）この日第二大隊だけは北方十キロの義堂鎮へ出発、警備についた。

同3日　晴れ。七時起床、点呼と遙拝、午後一時、遺骨を護送して内地帰還中の里中上等兵、無事任務終り、復帰せり。

同4日　晴れ。七時三十分起床。功績事務始まる。大毎（新聞）の加藤乙一氏きて撮影、父無事と聞き安心。

○　○　○

雲夢へはいるまでは連日、日中行軍と夜行軍が続き、落後者も出たことはすでに述べたとおり。これは第九中隊長だった太田雄三さん（津市船頭町、県営アパート）の思い出話。

行軍途中、津市一身田出身の兵が〝銃が重いから〟と捨ててきたのを見つけた。

（何たること！）太田中隊長は初めて兵にビンタをくれた。「気がつかなかったのか」と小隊長にもどなりつけた。だが、いまさら拾いにもどることは出来ない。

そのまま雲夢にはいった。師団も集結してきた。着いて間もなく、川向こうに駐屯する野砲連隊から軍曹が兵一人を連れてやってきた。「自分たちの所で、確かに太田隊だと名乗る兵がうろついていたが、その兵が帰ったあと銃が一丁少なくなっているのです」

（やったな）と思ったが、

小休止五分間

「妙ないいがかりは困る。兵を集めるから納得のいくまで調べ上げてくれ」

と中隊内をさがさせた。だが、ついに野砲連隊の銃は出て来ない。軍曹は恐縮しながらも首をかしげて引き上げて行った。実は―銃を盗んできた一身田の男は、運よく歩哨に出ていたのだ。さっそく盗んだ銃をひそかに師団の兵器庫にほうり込み、代わりにその兵器庫から新品をちょろまかしてきたのであった。

○　○　○

十二日は山田連隊長の慰霊祭が行われた。転出した渡辺綱彦少佐に代わって第一大隊長に就任した角田勇中佐(愛知県出身)=雲夢で着任=が指揮をとり、各中隊の代表、現地の治安維持会代表ら約千人が参列してめい福を祈った。霊前には生前故人が愛飲した出身地佐賀県の銘酒「富の寿」が供えられ、将兵の涙を誘った。

第十一章　騎兵 砲兵 航空兵 輜重の活躍

騎兵の活躍

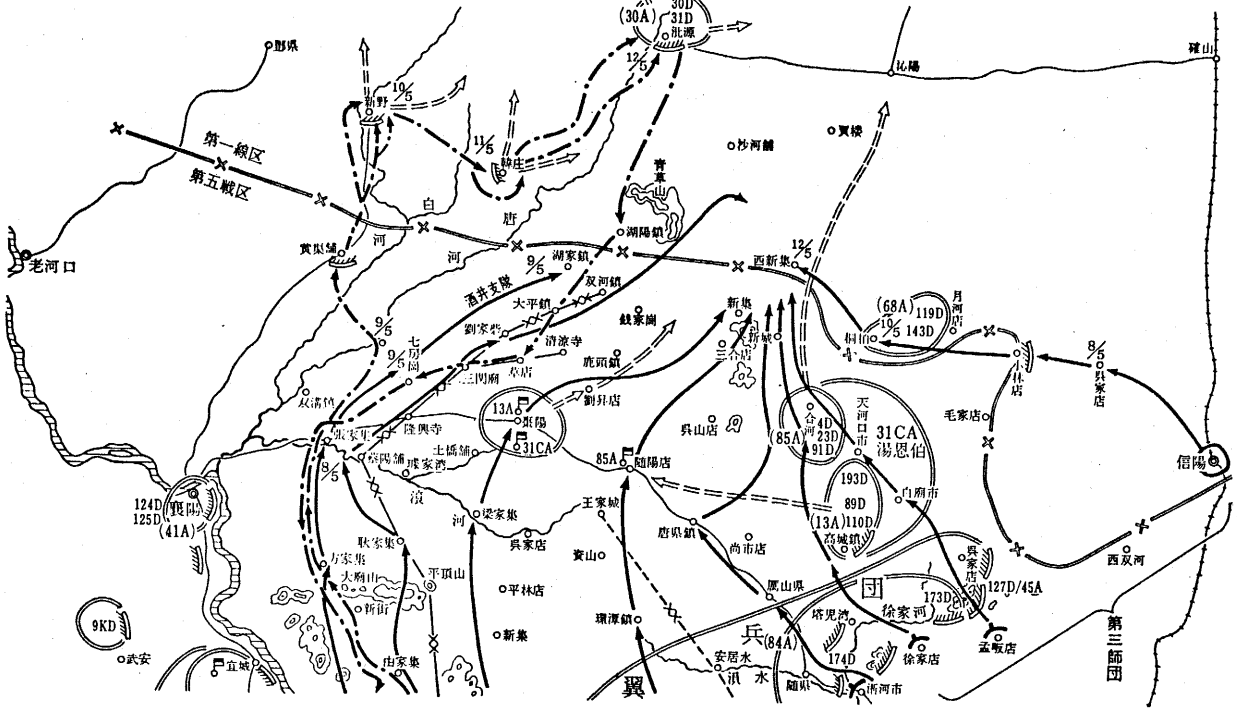
「先陣の功は我に」

——意気上がる〝花の騎兵部隊〟——

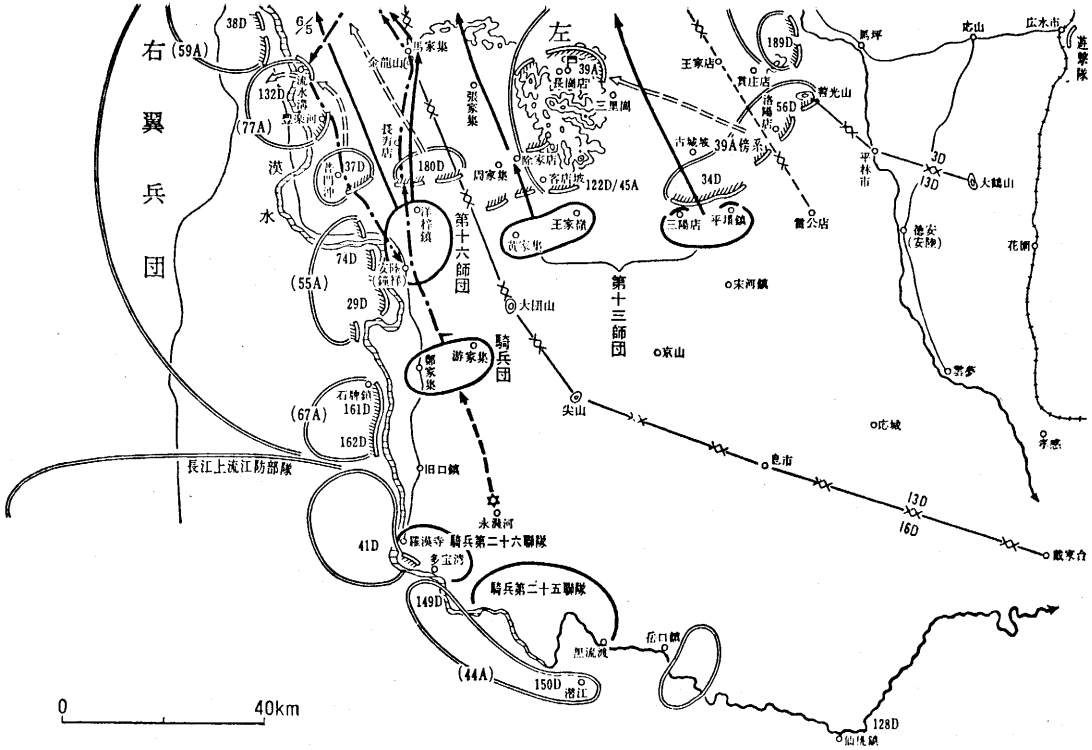
襄東会戦

昭和十四年四月下旬、連隊は漢口攻略戦を終え天門（漢口西北方）に位置し、警備討伐を実施する他、次期作戦準備中のところ中支方面軍司令官岡村中将は中国軍約二十個師団が襄東地区に兵力を集結しつつあり、また漢口流域地区の中国軍を合わせると約三十五、六万の大兵力が近く漢口の奪回攻勢を企図しつつあるのを察知し、すみやかに敵の企図を破砕し、襄東平野においてこの敵の大軍を捕捉全滅しようとしたのが襄東会戦であり、この作戦に従事したのが第三師団、第十三師団、第十六師団と騎兵集団であり、四月下旬、この作戦の発動が行われたのである。

襄東会戦経過概要図（昭和十四年五月）



昭和十四年初頭から秋ごろまでの中国方面の作戦



同時に連隊は師団の指揮下を一時はなれ小島少将の指揮する騎兵集団に入り作戦に従事する事となった。（編成、兵力はK17大隊、K20K25K26四個部隊、兵力四千騎）

連隊としてはこの大部隊の騎兵集団と作戦行動を共にした経験はなく、行軍に当たり延々長蛇土煙を高く揚げ前進する様は数キロに及び、恐らく敵側より遠望した時、数万の日本軍の来攻と判断し、戦わずに敵に心理的な恐怖感を与えたものであろう。集団は「安陸」において各部隊を掌握し、直ちに行動を開始、以後峻険な悪路を駿足にものをいわせて突破、五月早々に早くも敵の牙城新野県の頑強な敵を撃破し同地を占領した。当時連隊は、新野攻撃の前衛として正面攻撃を実施していたが、集団命令により騎兵第二十六連隊と正面を交替し予備隊となり、以後左迂回隊となり行動中、黄粱舗付近において敵と遭遇するところとなり、激戦の後敵を撃退、引き続き敵を急追して北方なお郭庄に向かい前進した。

当時騎兵団主力は新野城を占領し、残敵を掃討中の模様であった。当日の黄粱舗付近の戦闘において、尖兵斥候として任務続行中の下士斥候が潜伏中の敵と遭遇し、不意のため全斥候が期せずして抜刀、敵を襲撃するうち、上野寅次郎氏が敵の銃弾を受け馬上において壮烈な戦死を遂げた。緒戦において初の犠牲者を出すに至った。

連隊は当夜肖郭庄に露営、翌十一日騎兵団はいよいよ敵主力の集結を予想する韓庄に向かい進撃を開始した。当時の将兵の心境としては覚悟を新たにすると共に、他連隊との競争意識を旺盛にし、先陣の功は我々と人馬共に意気軒昂であった。

先陣切る山根小隊

――敵は逃げ場失い右往左往――

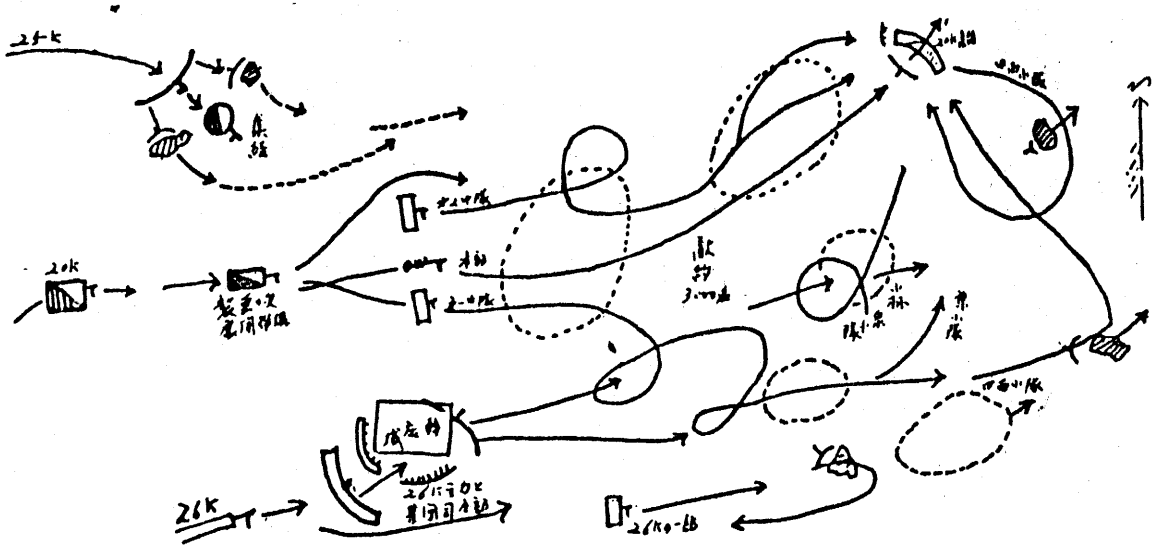
襄東会戦

当時の情報を総合すると、予期していた通り、韓庄城内外にはわが軍の圧迫により大部隊が集結し、騎兵団の来攻を予期して陣地を補強しつつ迎撃準備しているもようだ。この情報に基いて集団長小島少将は輩下各部隊に対しその部署を下命した。すでに各部隊は戦闘隊形をもって行進しつつあり、前衛部隊方面では敵と接触、徒歩戦によって一部交戦に入った模様である。右縦隊であった騎兵第十七大隊は西方より、また後衛であった騎兵第二十六連隊は大きく南に迂回し北面して一挙に攻撃に移った。左縦隊であったわが騎兵第二十連隊は、大きく北に迂回して韓庄城の東方に進出する任務を下命されていたが、部隊長須藤中佐は軽挙に突進する事なく、戦機を失する事なく慎重に前進を続け、予定の地点に前進中であった。

南方、麦畑の端にある楊柳の繁る部落付近からし烈な彼らの銃声が響いて来る。主攻撃方面の突撃直前の戦況ではなかろうか。〝戦機正に熟す〟――その時砂塵をけって騎兵団副官が部隊長のもとに馳け寄り乗馬のまま大声で、「騎兵団命令、韓庄の敵は退却の徴あり、須藤部隊はただちに乗馬襲撃、敵を捕捉全滅すべし…」

部隊長須藤中佐はすでにこの下命のある事を予知していたもようで、各隊長の集合を命じ、騎兵団命令の要旨と共に連隊命令を下達し、ただちに襲撃のための態勢に移ろうとした。連隊として名誉この上なく、

輪屋付近戦闘要図　（昭和14，5，11，9:00）（吉田治郎氏所蔵の戦闘詳報による）



かつ騎兵団長以下旅団将兵がわが連隊の成果いかんと期待と監視の中においての襲撃であり、責任まさに重大である。その時突如重機小隊（小隊長山根中尉）が先陣を切って前面の戦車隊を越えた。連隊展開の援護と退却中の敵集団に対し一撃を加えるため猛烈果敢な陣地進入である。

続いて第一中隊（中隊長光田中尉）本部第二中隊（中隊長池内中尉）と続き、瞬間にして本部を中心として左翼に第二中隊、右翼に第一中隊が展開、間髪を入れず「抜け刀！」と命令、続いて部隊長須藤中佐の剣尖一閃「襲え」の号令と共に襲撃ラッパが高らかに鳴り響く中を、軍旗を中心として期せずして起こる喚声かドヨメキか、人馬一体となって剣尖を閃めかせ退却中の敵約三千の中に果敢に突入した。随所において逃げまどう敵を斬殺、刺突、ある者は馬蹄にかかり、ある者は土下座し、群がる敵は逃げ場をなくし、右往左往中に反撃に出る者、にわかに反転して軽機や迫撃砲を発射しようとする勇敢な敵もあったが、猛烈果敢な襲撃部隊になぎ倒され、壊滅していった。

この間前方無名部落にいた敵から退却

援護のため、重・軽機、迫撃砲をもってわが襲撃部隊に対し射撃して来たが弾道が高く、かつ迫撃砲弾がさいわいに不発が多いため大戦果の割に人馬の損害は意外に少なかった。当日の戦闘において、第一中隊長光田中尉が展開時に敵重機の集中射撃を受け壮絶な戦死を遂げたのをはじめ、昭和十六年兵の西米津鎮氏の戦死、軍馬数頭を失ったほか重軽傷数名の損害であった。当時、内地の各新聞はわが連隊の壮挙に対し、世界戦史最後を飾る乗馬襲撃戦であると賞讃、また同年七月第十一軍司令官岡村中将より部隊に対し、感謝状を受けるなど、輝かしい連隊戦史にさらに栄誉を加える事となった。

砲兵の苦闘

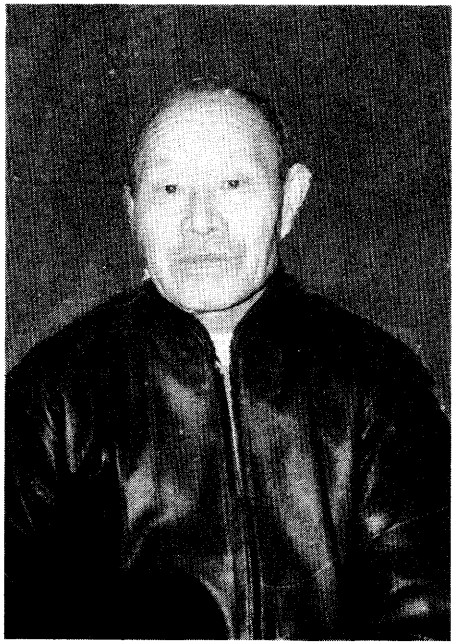
功績が重なり「金鵄勲章」

――鈴鹿の川北さん、人の嫌がる仕事した――

金鵄勲章の話

支那事変中、野砲で活躍、金鵄勲章に輝いた川北春吉さん（鈴鹿市上田）を訪ね、当時のことを回想していただいた。その話の一つひとつにさすが金鵄勲章の受章者であると頭が下がった。（小林正雄）

小林　川北さんの金鵄勲章談をお聞かせいただきたいと、お訪ねする時間を求めつづけてきましたが、なかなか機会に恵まれませんでしたが、ようやく思いがかないました。うれしいです。



今の川北春吉さん

川北　金鵄勲章をもらったのだから強力無双、天下に鳴り響いた大功績があったのではないかとみなから聞かれるが、これが私には恥ずかしい。私にはとるに足りない功績しかなく、むしろ皆さんより地味な下積みの戦争しかしていなかったのです。人の嫌がる仕事を真面目に陰日向なしに行ったこと以外にありません。四日市の垣見君も金鵄を戴いているが、あの人もそうでした。

小林　そうです。私も功績係をしていましたからよく知っていますが、金鵄を胸に飾るにふさわしくない人は金鵄が泣きます。金鵄を受章しても恥ずかしくない人を選考するのです。殊勲甲が三つあろうが五つあろうが、金鵄勲章を胸にするにふさわしくない人には軍、師団、連隊、中隊からの命令でもあり申請できなかったのが実情でした。金鵄勲章を拝受される方々は軍隊のみならず社会人としても名実ともに尊敬される立派な人なのです。ところで川北さんは野砲での分担は通信でしたか？　野砲の通信は大変でしたね。

川北　はい。大隊と連隊の連絡です。砲弾で通信は途絶する、修理に走らなければならない。弾は容赦なく降り注ぐ。その戦場の光景はいまでも鮮明に浮かんできます。紫金山の手前だったと思うが、大隊本

部が全部集まったときに、大隊副官の木原少尉が「こんな真面目な兵隊はほかにおらん、安心して信頼して使える立派な兵だ」と大勢の前で私をほめて下さった。そこまではよかったが、暗夜である。敵の迫撃砲で電話線がずたずたに切られている。これを修理してきてくれ、というのである。どこで切れているか分からないからもちろん行く者はない。私が行ってきますと志願しました。線をつないで声が通じるようになるまで頑張るので「朝までつながらなかったら死んだものと思ってくれ」と言って出かけたものでした。線をたぐって手さぐりで進出すると馬のハラワタに触ったり、戦死者につまずいたり…なにしろ普通の所ではない、暗い山中です。どこに敵がいるのか分からないジャングルの中だから敵も味方もない。ものを言ったら殺される。それでなくとも人の気配がすると乱射してくる。敵と途中でぶつかる。こちらが一歩おくれれば殺される。頭の髪が立つというか、ほんとに髪の毛が逆立ちますよ。

小林　たしかにそうですね。

川北　敵陣横断中、敵に遭遇、敵は機関銃で無茶苦茶に乱射、なぎ倒しに射ってくる。あの時はもうこれが最期かと手を合わせましたね。このような功績がたびたび重なって金鵄が戴けたのだろうと思います。

小林　金鵄勲章は軍人の憧れの的であり、亀鑑であり、国民の亀鑑ですよ。

川北　私たちの大隊長で森少佐という人がいましたが、気が小さくて弾がくると大急ぎで鉄カブトをかぶって壕の中へ飛び込んでしまって出て来ない。あんなことで大隊長がつとまるのかと兵からも馬鹿にされていた。その代わりに森田中尉が双眼鏡を手にして勇敢に指揮していた。あの姿は見事でした。

小林　たしかに腰ぬけ将校もいましたね。そんな将校は、兵隊の方で数のうちに入れておらず、むしろ

かわいそうだと同情していた。たいていは学卒の連中だったが、この連中に戦死者が多いのは皮肉なことでした。私たちは鉄カブトは重くて動きがにぶるから邪魔でかぶったことがなく、中隊長から怒られたことがあったりしてね。

川北　野砲が一番活躍したのは南京戦ですが、師団長が野砲出身の中島今朝吾中将だからずいぶん乱暴に引き回されました。紫金山は撃って撃って撃ちまくり、砲身が真っ赤に焼けた。それこそ野砲の独壇場でした。

小林　徐州や大別山の野砲隊の活躍も大変でしたね。

川北　私は徐州戦は入院中で参加できなかったが、大別山では存分活躍できた。しかし大変でした。旅順の攻撃もあれほどではなかったのではないか。毎日毎日おびただしい戦死者の続出で、それを担架で運ぶのが野砲の役目のようになりました。

小林　野砲は十糎でしたか。

川北　いや七糎半。だからトーチカなんか撃てば百発百中吹っ飛ぶ。その他は散弾で一発二百七十の弾が入っている。

砲兵隊の観測指揮班

それをパッパッとかぶせるのだから敵さんの逃げ出す姿が蟻のようでした。

小林　野砲の散弾を撃たれたらたまらないだろう。通信線確保は野砲の花ですよ。

川北　一番前線の近くまで行きますしね。私は第一班の通信班長だったから歩兵と同じ鉄砲をもって射撃したこともありました。元国務大臣稲村さんが金鵄会の会長をしていて下さるのでなんとかして下さると思うが、軍人恩給の恩典にも浴していない者がいる、金鵄をもらっていても年限が足りないから…。

小林　金鵄勲章拝受者には生死を問わず国家はその功績を顕揚、感謝すべきであると私は考えています。話は愚痴になりますが、お国のために全軍の戦勝の礎になろうとよろこんで生命を捧げてきた者を一時さげすむ言葉を耳にしたことがあり、胸の張りさける思いをしたことがあったが、今日の平和で豊かな日本は俺たちの犠牲の上に成り立っているのだ、とだれはばかることなく叫べる時代になったことはありがたい。

ある航空兵

教え子たちと戦闘へ

――藤林大尉飛行偵察将校で出征――

支那事変当初から約九ヵ月にわたり飛行偵察将校として機上出動百十二回（飛行時間約二百九十四時間）

華北、華中の空をかけめぐり、徐州会戦の準備偵察中、壮烈な最期をとげた陸軍歩兵少佐、藤林保之さん（津市丸之内本町出身、当時三十三歳）の物語である。実父の保さんは旧士族、日露戦争の勇士、また次弟の保次さん、末弟の武夫さんも自衛隊に勤務していた。

昭和十二年七月十五日、東京・代々木で陸軍士官学校外国留学生区隊長として外国学生に教練中召集を受けた。士官学校時代、シナ語班だった藤林大尉は卒業前から口ぐせのように「おれはシナ大陸で死ぬのだ」と、同期の汾陽光文大尉（浜松出身）らをとらえては抱負を語っていたものだ。

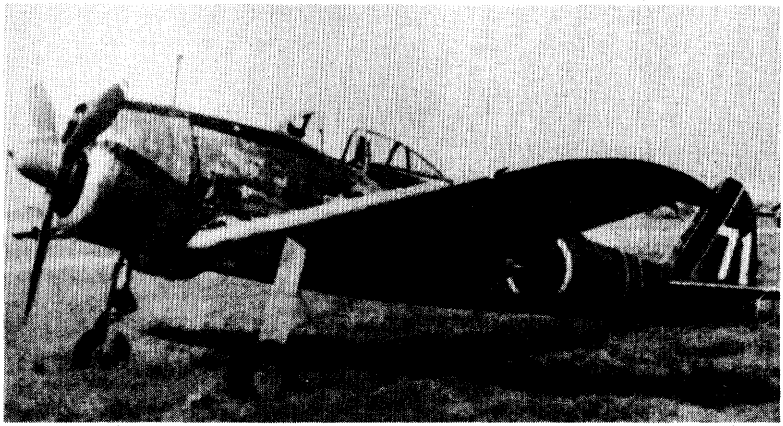
召集令状を受けた藤林大尉はその夜「偵察将校として出征し得ること、本懐これに過ぐるものなし」と日記にしたためた。だがその心境は複雑であった。かって北支那駐屯軍に勤務し、次に陸士外国語生隊区長として二年間、シナ留学生を教育してきた。それがいま、自分の教育した子弟と戦うことになったのである。その夜の外国学生隊将校主催の送別会でサカズキを受けながら（おれは子弟に慈愛のムチを打つのだと悟ろう。おれも彼らも大勢にさからうことは出来ない。やがて時期がくれば、お互いの心は通じるはずだ）と心を決めた。

当時の九二式偵察機

一日早く出征する汾陽大尉を東京駅で見送った藤林大尉は、翌十七日大久保大尉と共に東京を発った。徳川航空兵団飛行第三大隊第二中隊付となった。同第三大隊は岐阜飛行第二戦隊において動員された飛行隊で、編成は第一、第二、第三の三個中隊、偵察飛行隊は当時の作戦の常として地上軍に配属になり、地上作戦に協力した。つまり、藤林大尉戦死の当時（昭和十三年四月ごろ）は、所属は徳川航空兵団（戦闘序列で支那派遣軍に属す）だが、そのころは津浦線を北上作戦した第二軍に配属されていたという具合である。偵察将校は歩、騎、砲、工、輜（し）の兵科の中から特別の教育を受け、偵察中隊付として勤務することになっていた。汾陽大尉（砲兵出身）は第一中隊に付属していた。

七月十九日、藤林大尉は故国をあとに、華北めざし飛び立った。途中、悪天候とエンジン不調で難航し、二十四日やっと華北の基地に到着、二十七日根拠地の天津飛行場に移動した。直ちに村上軍曹の操縦で南苑、蘆溝橋付近を偵察した。

その日、愛機の陸軍九二式偵察機を入念に手入れする彼の姿が人目をひいた。機銃は飛行機の生命である。九二式偵察機は操縦



一式隼戦闘機、海軍の零戦に相当する陸軍機

者用の個定機関銃が機首に二銃（地上掃射、空中戦闘用、合わせて千二百発）それに後部座席の偵察者用の旋回機関銃二銃身（同、同）を搭載している。敵機の妨害と闘い、偵察の目的を果たし、あるいは地上友軍部隊を救援するためには信頼出来る機銃でなければならない。エンジンの動く限り縦横に活躍するための唯一の頼みは戦闘銃である。彼は黙々と銃身の手入れをした。

明けて二十八日、日本軍は南苑をはじめ北苑付近に攻撃を開始した。敵は宋哲元の率いる二十九軍の精鋭だ。

この日早朝から豪雨が襲来した。だが「爆撃隊は、全力をもって南苑、西苑等各地を爆撃せよ」との厳命だ。友軍機は豪雨をついて次々基地をとびたっていく。藤林大尉は雨を避けてアンペラ小屋に逃げ込んだが、たちまち飛行服はぐっしょりぬれた。

「ひどい雨だ」

舌打ちする彼の耳に、愛機陸軍九二式偵察機の軽快な始動が響いた。

九二式偵察機は単葉高翼、主要部分はジュラルミン・パイプで翼、胴体は羽毛張りで非常に軽い。それでも時速二百キロ（常用一六〇―一七〇キロ）のスピードで約四時間半とべる。座席は複座で前席は操縦者、後席は偵察者、機銃は既報の通り機首の固定（操縦者用）旋回（偵察者用）各二銃身を備え、胴体下部には十五キロ爆弾六発を抱えている。もちろん軍用写真機（固定、携帯の二種）や信号弾も積んでいた。地上協力にはもってこいの機種だった。第一線近くの軽易な飛行場にも着陸でき、第一線との連絡も容易なので重宝がられ、各種地上作戦にも必ずといってよいほど参加した。このため敵地上火器による損害が

多く、数おおくの勇士を失った。藤林大尉もその一人である。

午前九時五十分、藤林大尉はきょうの操縦者、村上軍曹をうながして第六号機に搭乗、地上部隊に直接協力するため北京から南へ五キロの南苑付近をめざして飛びたった。

大粒の雨が風防ガラスをたたきつける。視界はほとんどゼロだ。村上操縦士が水平儀を使っている。九二式は地上直協機のため、とくにひどい天候以外はいかなる場合でも飛び立った。普通〝目視〟で飛行するが、操縦のための水平儀、コンパスなど諸計器は全部そろっていた。

機は雷雲をかき分け、友軍兵団間の連絡を保ちながら敵情を捜索して飛びつづける。地上部隊は、南苑の敵に苦戦のようだ。藤林大尉は、地上攻撃に参加する必要を感じた。操縦カンを握る村上軍曹も〝得たり〟とにっこり笑った。操縦者と偵察者は普通、伝声管や手の合図で話すが、ちょっと体を乗りだせば肩越しに耳に口をつけることが出来、声で十分に意思が通じる。しかしなれると夫婦みたいなもの、ちょっとの合図で万事OKなのだ。

村上軍曹はレバーをしぼり、翼を左に傾けながら機首を下げる。機首の揺れを修正する。照準器の中に敵陣地がみるみる大きくなった。千、五百、三百……。プス、プス、地上から撃ち上げてくる敵弾が翼にからみつく。偵察高度（状況の許す限り）一千、急降下しても八百以下は中止せよと命じられている。地上射撃の命中率が大きいからだ。

藤林大尉は敵弾をまったく意にとめない。まるで平時の演習のようだ。ついに高度二百、大きな口を開け、逃げまどう兵舎の敵兵群にまず一連射、エンジンに最大回転を与えて急上昇旋回、「村上、いいぞ、い

いぞ」航空手袋をかけた手を二、三度たたく。再び機首を下げて突っ込む。機銃弾は確実に敵兵の背に食いついていく。兵舎が火災を起こした。確認して機首を基地に向ける。部隊長栗山新太郎少将は「支那事変最初の二百㌔降下だ」と彼の大胆さにおどろき、感心したものだ。

邦人避難民に激励文

――大胆な〝二〇〇㌔〟降下――

午後は南苑から北方に退却する敵騎を追った。敵騎百余を発見、直ちに急降下爆撃、機銃掃射で大損害を与えた。午後四時、南苑いまだ落ちずの報で中隊全機出動、現地に至ったが、すでに占領していた。機首を長辛店と南苑の一部にめぐらして帰る。この帰途のことだ。

このころ北京に在住の邦人は続々避難をはじめ、日本軍の空陸共同作戦の総攻撃が始まった二十八日からは米、英、仏の三国人も交民巷に閉じこもり、三方の入り口を閉鎖、電報の発信も途絶、軍用電報さえ中国軍の妨害でわずかに少数の無線連絡が出来るだけという状態だった。城外各所に日本軍の爆撃機が飛来、砲撃のごう音がとどろいているが、戦況がどうなっているのか全く分からない。

シナ新聞がデマを振りまいている。居留民は戦々恐々としていた。不安なおももちで空を仰いだ時だった。日の丸をつけた飛行機が急降下してきた。あっというまに交民巷の無線アンテナすれすれまで降下、と見るや、突然搭乗員の一人がからだをひどく乗りだし、何か小さなものを邦人避難者の広場に落とし、機首をぐっと下げたまま北京方面へ飛び去って行った。投下されていたのは通信筒、「日本のみなさん、日

本軍は城下に迫っています。北京の平和は近いでしょう」という激励文が走り書きしてあった。もちろん投下したのは南苑帰りの藤林大尉であった。この空からの贈りものは二千数百人の日本人避難民への何よりのもので、握りめしとタクアンだけの夕食をとりながら〝通信筒〟のことで話は持ちきりだった。

こうして初陣の第一日〝飛行隊に藤林あり〟の評判が広がった。このことを彼は日記にも父への手紙にも書かなかった。後日、父親から送られた新聞記事を見て「任務外でやったことなので、書き立てられてかえって迷惑です」という返事をだした。

エピソードは、その人のかくされた性格をみることができて面白い。士官学校の予科を終えて、本科に入るまでの間に士官候補生として隊務研究があった。そのとき大隊対抗（歩兵第五十七連隊）の夜間演習があり、彼の所属する大隊は防衛で、彼は攻撃隊の行動偵察のため斥候に出された。折からの闇にまぎれて機敏に、敵の大隊長の側まで潜入して、おとものようについて行った。いよいよ攻撃隊がわが陣地に近づき、ひそかに隊形を整え、いまや突進というときに、懐中電灯でサッと大隊長の顔を照らし「敵の大隊長」と叫んで逃げて行ってしまった。たちまちわが防御陣地から火器がいっせいに火を吐く。まったく大胆不敵なことをやってのけたものだ。この大隊長はハラのふとい人で翌日「こやつ、おれの顔を電灯で照らしよった、ひどい奴だ」と笑ったものだ。

また兵たちは「藤林少尉について行くとうまいものは食わしてくれるがヘトヘトに疲れる」とも言った。機敏でユーモアがあり、討論好き、典型的な武人の性格をもっていた。写真好きで、写真機には大金を使っても平気な顔、風物を写して楽しんでいた。

翌七月二十九日未明、露営の夢を銃声で破られた。とび起きて警備線につく。天津保安隊の反乱と察した。

午前三時、ここ基地、天津飛行場の周囲は、身の丈を没するコウリャンが茂り、敵情が分からない。昼間地形偵察をおこたっていたために全く四方から銃声を聞くような錯覚に陥り、「不覚ッ！」と歯がみした。

やはり彼は歩兵将校だ。急務は主力との連絡と敵情捜索だと判断した。だが主力との連絡の道路網は、まず敵情を知った上でないと不可能だ。一方、栗山部隊長も同じことを考えていたのだ。（まず斥候だが、航空兵は日ごろから訓練してないし、困ったぞ）と腕組みをしたところへ、おあつらえむきの将校が顔をつき出したわけだ。藤林大尉は「敵情を見て参ります」と一語を残し、手に軍刀をさげてたちまちヤミの中へ消えて行った。そのとたん「しまったッ」栗山部隊長は思わず声をあげた。藤林大尉のあまりのタイミングのよさに「藤林なら大丈夫」との思いにとらわれ、一兵もつけなかったことに気づいたのだ。

敵中へとびだしていった藤林大尉は決して軽率ではなかった。日ごろ斥候の訓練など真似ごと程度しかやってない航空兵を連れて行ってはかえって足手まといになる、ととっさに判断、さっさととびだしたのである。彼の機敏な行動は、部隊長にまんまと一ぱい食わしたのだ。栗山部隊長は思わず苦笑をもらしていた。しかし、やはり無事帰還を祈らずにはいられなかった。

果たしてその頃、藤林大尉は敵弾と友軍の射撃の中にさらされていた。敵は飛行隊主力の位置、飛行場の北端めざして攻撃している。彼はその横っ腹に突っ込んでしまったのだ。たちまち敵に見つけられ、集中射撃を浴びた。敵兵がつい目の先まで接近して通り過ぎて行く。コウリャンの中でじっと息をつめる藤

林大尉は「やっぱり兵を連れて来なくてよかった」と、不敵に白い歯をみせた。午前五時無事に部隊へ帰ったが、さすが大胆な彼も「危フカリキ」と日記に書いている。

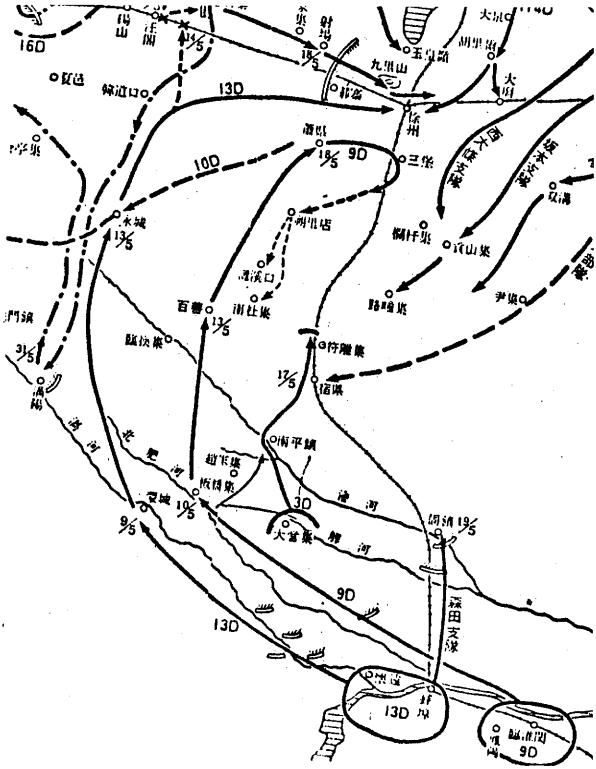
午前六時、飛行場襲撃部隊の退却状況と偵察のため金山曹長の操縦で出動、さらに午後五時、小西大尉と蘆溝橋方面に出動した。きのうの初陣に午前も午後も出動、夜半の襲撃で偵察の危険をおかし払暁まで交戦、相当疲労しているはずなのにさらに再び、三たび飛び立ったのであった。まったくエネルギッシュな活躍だ。

この日夕方、蘆溝橋方面に出動した際、操縦カンを握ってくれた小西大尉は、藤林大尉より古参の航空兵だ。だが偵察は、もちろん新参でも藤林大尉の任務である。余談になるが、戦闘とか爆撃とかは航空兵がやる。偵察は事情が違うので、偵察将校は各兵種からそれ相当の人をよりすぐっている。偵察将校も必要に応じては戦闘も爆撃もやらなければならないし、やる能力も持っているが、飛行機の操縦はその任務ではない。機眼をもって戦略能力を発揮すべきもので、要は頭脳である。

一方、操縦者は偵察者が写真撮影など任務を尽しやすいように、その希望に合わして操縦しなければならない。偵察将校は兵科をこえるものであって、航空部隊長の命を受ける場合より高級指揮官の命を直接受けることの方が多い。また航空の隊長を経て命令を受けても、独立的に働くことが多い。ときには集団的に、地上部隊に直接協力して戦うこともあるが、これは偵察将校の任務ではない。偵察の成果は時機、天候により大きな違いがあるが、一般に戦術的判断、努力、敏しょう、果敢の総和である。〃何機撃墜した〃とか〃どれだけ爆破した〃とかは、確かに花々しい。しかし隊の指揮官は別として機と機の戦いや、爆撃

動作は下士官が将校をしのぐ働きも出来るが、重大な戦略偵察はそういうわけにはいかない。ぜひとも将校中に優秀な将校を必要とする。

偵察機はなるべく敵にとり合わない。無益な戦闘はしない。やむを得ない場合だけだ。その代わり、偵察のためには、敵の待ち構えている上空を危険をおかして行く。まるで撃たれに行くようなものだ。(藤林大尉の最期はそれであり、下には敵が鉄砲を向けて待っている。)雲が低くて高くからは写せない写真をぜひともみやげにしたくて、撃たれるのを覚悟しながら降下し、機の重要部を撃たれたのである。加えて単機で何百キロもとぶ。しかもその功績は参謀官のものとなり、偵察将校の功績となることが少ない。重大なことほどかえって他からは見えない。ひそかに報告してしまえば、それで終わりである。他に語ることもできない。ほとんどが永久に知られないですむこともある。



徐州大会戦の一曲固鎮付近

銃火受け敵地へ不時着

――天覧に供された航空写真――

こうした〝縁の下の力持ち〟任務を続けていると、「ちょっと行きがけの駄賃」をやりたくなるのが人情だ。これは帰りがけの駄賃の話―。

さてその日、命によって蘆溝橋方面に出動してみると、蘆溝橋では折から地上部隊は激戦中である。まだ苑平（えんぺい）県城を占領するに至らない。よく見ると、敵の戦闘動作が意外に活気づいてはいるがどうもおかしい。持久防御でもなく、かといって攻勢に出る様子でもない。どうやら退却の前ぶれらしい。

そう判断すると、翼をのばして敵の頭上を越え、その後方へ飛んでみる。八キロも飛行すると、大会廠という部落がある。四方に道路の通じる部落だ。見ると歩兵、騎兵を合わせて千五百も集結して、なにかたくらんでいるようす。

「ええい、やっつけろ」

藤林大尉は操縦席の小西大尉と首つきあって急降下爆撃を加えた。まず低く、東北方から西南方に飛んで十五キロ爆弾四発、計六十キロを投下、引きかえしてこんどは四方から東方へ向かって残る二発を落とす、ちょうど十字に飛びながら爆弾を落としたわけだ。おそろしく低空でやったので確実に敵群へ命中。爆弾の落ちた地点を中心に人馬の死体で大きな花の咲いたような形が六つできた。兵百二、三十と馬五、六十頭をやったのである。

長辛店にも少数の敵を発見したが、退却のようすだったのでとり合わず、ただ関係部隊にそのむね連絡して午後七時四十五分帰投した。日はすでにとっぷり暮れていた。

やはりこの爆撃は敵の退却を早めた。背後をかく乱したからだ。果たして夜中に退却、翌早朝出動したが主力は全くなく、永定河右岸にも大きな敵はなかった。きのうの六個の地上の穴だけはそのまま残っていた。北京付近の戦は一段落をつけた。

南苑の初陣以来、藤林大尉は南口、懐来付近の戦闘、津浦線小王荘付近の戦闘、琢州会戦、保定会戦、正定、石家荘攻撃、邯鄲方面への追撃、折口鎮の攻撃、太原攻略戦、蘇州付近掃討戦などに奮戦、徐州会戦準備偵察中に戦死するまでの九ヵ月間に、実に機上出動百十二回を数えた。

奮戦記を一々とりあげているときりがないが、実戦的芸術写真として当時の「アサヒグラフ」に紹介され

愛機遂に還らず、ああ

た話を一つ。

八月下旬、板垣兵団は懐来平地に進出した。このため敵約三個師は良郷西方の山系を北上して永定河谷から側面をかんとする情勢となった。そこで川岸兵団が良郷南方地区からこの敵に向け、行動を起こした。八月二十一日、藤林大尉は川岸兵団に協力のため偵察将校を命じられ、良郷西方の山地、琉璃河鎮、琢県付近の敵情捜索に飛んだ。

午前九時半すぎ、琢県に向かう途中、琉璃河鎮（るりかちん）駅構内に六列車が停車しているのを発見した。

「獲物だぞ」

藤林大尉は操縦席の真貝准尉に肩越しに合図した。中の一列車は有ガイ貨車と兵員満載の無ガイ貨車だ。まずこれを狙って降下爆撃に移る。

胴体下には十五キロ爆弾を四発抱えており、四発連続に投下するつもりで操縦カンを倒した。九二式は六発（計九十キロ）搭載でき、単発投下も同時投下も連続投下もできる。もちろん水平爆撃も急降下も出来る。

四発連続で投下するつもりで北から南向きに、鉄道線沿いに高度千から七百まで降下したが、急上昇してふりかえると、操作機の故障か一発しか落ちていない。だがその一発は、こぼれるばかりの兵が載っている列車に命中していた。

残り三発は単発投下することにし、やはり南向きに急降下した。これはわずかにそれて列車横のレールに落ちた。三回目は西方から鉄道真正面に降下したが、これも手前の畑で爆発した。

最後の一発、また南向きに機首を下げ、思い切った低空で離した。エンジンをふかして急上昇旋回、首尾はどうかと機首をめぐらすと、ものすごい白煙をあげているではないか。無ガイ車の隣りの有ガイ車に命中、同列車には火薬が満載されていたのだ。連結されていた二、三両はどれも転覆していた。予想外だった。ただちに旋回してカメラにおさめた。これは〝天覧〟に供された。

太原攻撃は激戦だった。それだけに空陸一体の戦闘は涙ぐましかった。藤林大尉は板垣将軍陣営に連絡将校として常に第一線に進出、刻々密接不離な戦況を航空隊に送った。十二年華中に転進、おもに板垣部隊に協力していた。

飛行第三大隊（徳川航空兵団）は、津浦線を北上してきた荻州兵団の配属となった。北上軍は十三年三月から四月にかけ臨淮関、蚌埠（ばんぷう）付近に集中、四月下旬いっせいに行動を開始した。

さて、行動開始前の四月上旬、地上軍は集中地において作戦を準備し、航空部隊は奥地の攻撃のため徐州付近の空中偵察による作戦を準備中だった。すなわち敵の集中状況、陣地の状況、道路及び交通網、橋梁、敵後方の移動等々、藤林大尉はバンプウ飛行場にあり、おもに第十三師団方面に協力していた。同期の汾陽大尉とは中隊が違っており、たまに会って手柄話に花を咲かせたものだった。敵は日本軍の北上を阻止しようと宿県以南に次第に兵力を増加して陣地を増築、また宿県東南の要衝「固鎮」（こちん）以南、津浦線の各鉄道をことごとく破壊し、線路をはずしていた。

藤林大尉はバンプウ—固鎮間の鉄道状況の偵察、写真撮影を命じられた。四月九日朝、九二式偵察機・第五号機はすでに地上整備員横井曹長によって軽いエンジンの始動音を響かせている。操縦士の村上益曹

長（愛知県出身）ははや座乗、藤林大尉を待っていた。やがて藤林大尉は軍刀をひっ下げ、航空服を着用、飛行場北方の建物から現れた。この日も、おりから中国大陸は黄じん万丈の時期だった。黄河流域からの強風で吹き上げられた黄じんが天を覆い、視界が悪かった。それに敵機の活動も活発だった。

午前九時五十分、整備員たちが帽子を振る中を離陸した第五号機は飛行場上空を「の」の字形に旋回して、機首を徐州方向にむけ、見る見る小さくなって行った。それが最後の姿であった。基地をとびたった五号機はやがて固鎮南方橋梁に差しかかった。固鎮付近は敵の心臓部であり、あらゆる火器をそろえて防御している。徐州会戦でわが北上軍に重要な戦術的価値を与えた檜河、固鎮南側のその檜河にかかる問題の鉄橋はいま藤林大尉の眼下にあった。

「よし、それでは急降下、連続写真をとる」村上曹長に合図した。

機は機首をぐっと下げ、百、二百と突っ込む。高度は千五百から千…。雲が厚い。機は急上昇して再び急降下する。（くそ、雲が低い）「村上、思いきって突っ込んでくれ」彼はどうしてもいい写真をとりたかった。藤林大尉は歯を食いしばり、両手でしっかりとカメラを握って鉄橋をにらむ。機は雲層を破り、ぐんぐんと降下して行く。敵は銃砲火を集中して撃ち上げてきた。パンパンと空気の衝撃音。

突然、ガツンとショックを受けた。愛機は重要部を貫かれ、村上操縦士の腕からも鮮血がほとばしる。

「村上、しっかりせい」

「大丈夫です、これしきの傷…」

彼は必死に操縦カンを引き上げる。だが機は再び上昇はしなかった。下へ下へ下がっていく。敵機が見

る見る迫ってくる。右往左往する敵兵、銃を上に向け、射撃を続ける中国兵がすぐ近くに見える。機首はどうしてもバンプウの方へ向かなかった。そして間もなくプロペラも停止した。機は敵弾の射撃にさらされるまま、葉家湖西側に不時着してしまった。時に午前十一時三十分ごろ。

付近の部落には敵があふれていた。獲物にうえたオオカミのように、たちまち四方から敵が殺到した。二人は機銃を撃ちまくった。だが脱出は不可能だった。頼みの機銃弾も尽きてしまった。

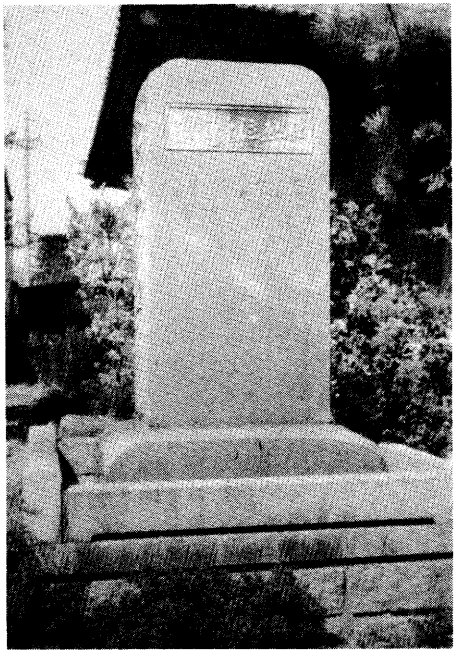
「村上！援護を頼むぞ」

というや、流れでる大粒の涙をふり払い、愛機のガソリンタンクに拳銃弾をうち込んだ。燃え上がる愛機、重要書類を投げ込んで灰にする。二人の拳銃には、それぞれ一発しか残っていなかった。

「村上」

「藤林大尉！」

二人はぐっと抱き合い、こめかみに銃口をあてた。



津市岩田町阿弥陀寺にある藤林大佐の碑

基地では、偵察飛行予定時間の三時間余が経っても帰投しない藤林大尉の安否を気づかっていた。中隊を総動員して捜索した。しかし翌十日になっても、ようとして消息はつかめなかった。本部にもあせりの色が見えだした同夜九時三十分、中国側放送が次のように報じた。

「九日午前十時三十分ごろ（日本時間同十一時三十分）日本機一機固鎮低空に現れたるをもって、わが砲は直ちに高射機関砲で射撃した。要部に命中したるもののごとく、わが陣地を爆撃並びに機関銃射撃を行いつつ、葉家湖に不時着、搭乗員二人は拳銃自殺を遂げたり。わが方は機関銃二をろかくせり」と。

二人の遺体は六月三日藤林大尉の陸上同期生大久保大尉によって収容された。藤林大尉は即日、少佐（功四級勲五等）に、村上曹長は准尉（功五勲七）に進級した。

○　○　○

藤林大尉と士官学校の同期生だった汾陽（かわみなみ）光分氏は当時のことを次のように語っていた。

「出征前もわたしと彼は同じ勤務をしていた。東京・市ケ谷台の陸軍士官学校内に中華民国学生隊という中国軍の留学生を教育している隊があり、ともにその区隊長をしていた。そしてともに航空部隊の偵察将校として従軍した。学生隊にはかの蔣介石総統も少壮士官のとき学んだことがあり、中国の有名な将師のほとんどが同隊の出身であった。わたしたちが世話をした学生の多くは解散して帰国、それぞれの中国軍の中堅あるいは少壮幹部として日本軍と戦った。師弟が敵味方となって戦場に相まみえるわけで、軍人としてはこれ以上不幸なことはなかった。もともと同隊の目的は、日本と中国がかたく手をとり合って、東洋平和に挺身するためにあったのです。終戦のときの蔣介石の有名な訓示〝暴に報ゆるに暴をもってせ

ず〃は、かつてのその気持ちを堅持していたからであり、日本軍の武装解除、撤退にきわめてりっぱに、武人に対し、武人の礼をもってした態度は実に学生隊当時に彼らが学び得た尊い精神であり、いまなおその気持ちは永続しているのである。藤林君はこれら学生の前に、日ごろのことばを身をもって実行したのであり、中国軍の中の心ある武将が、子弟が彼のりっぱな行為を尊敬しないはずはなかったわけです」

佐々木信綱博士は「皇国の華（はな）」という賛歌をよんだ。また〃固鎮に散りし白藤の気高き姿敵すらも、たたえにけりと伝えたる……〃と清水吐月は「鷲の羽ばたき」というビワ曲を書き、同じビワ曲山川柳邨作詞の「固鎮の白藤」は全国に放送されたものだった。また津市岩田町の阿弥陀寺には〃壮烈鬼神〃の碑が建った。これは爆災にあったが、父の保さんが再建、自らよんだ「唯一機」と題する弔魂歌を刻んでいる。

藤林大尉はただ黙々と任務を尽し、大陸の空に若い生命を散らした。彼は自分の教えた中国留学生と戦うことになったとき、（やがて時期がくれば、お互いの苦しい気持ちは理解し合えるだろう！）と悩み、出征して行った。だが遂に彼にその機会はめぐらなかった。

藤林保之略歴　大正十五年京都府立第三中学卒業、昭和三年陸士予科卒、歩兵第五十七連隊付、同五年陸士本科卒、同八年機上射撃生として明野陸軍飛行学校入校、同十二年三月大尉、同十三年四月九日安徽省淮泗道葉家湖西側にて不時着、自決。

輜重隊の活躍（第三独立輜重隊）

隊員の大半が県内兵
——12年編成の独立輜重隊——

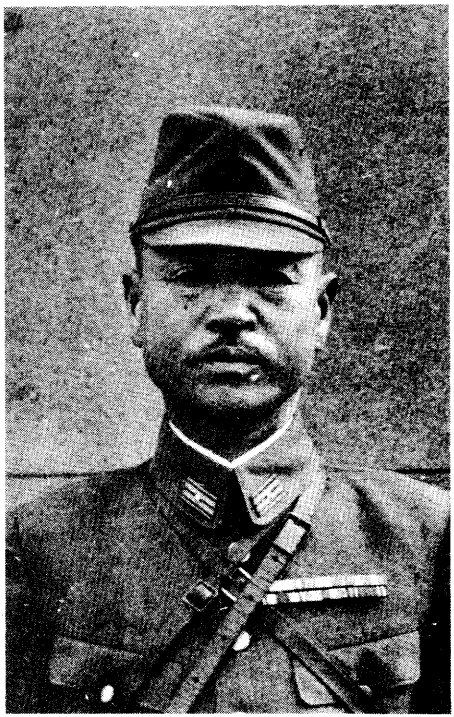
正しくは第十六師団兵站（へいたん）輜重兵（しちょうへい）中隊という部隊である。隊長は鳥羽市出身の林博少佐（二十三年没）、編成時の人員五百六十二人のうち四百二十二人までが三重県出身であり、部隊こそ小さいが、郷土部隊の一つである。

同隊は戦時編成されたもので、十二年八月二十九日、京都の野砲兵第二十二連隊で編成（西七条第一小学校）された。隊員五百六十二人のうち約半数が同八月二十五日の第五動員令で召集された大正十二、十三、十四年兵、補充は昭和六、七年兵だった。大半が県民であとは京都、滋賀、奈良の出身者。編成時の幹部将校は軍医、獣医、経理をふくめてもわずか七人、下士官一人、あとは兵というありさまだった。

車両は三百五十八両（三八式輜重車）馬は幹部の乗馬五十五頭、車両をひっぱるバン馬三百九十七頭、隊の編成は三個小隊で、一個小隊は二個分隊、分隊は五個班からなった。独立して行動するため自衛用に総兵力の三分の一が小銃を持ち、ほかには迫撃砲六門、軽機十門、手投げ弾などの武器を備えていた。同隊の任務はいうまでもなく、弾薬、食糧の輸送、補給で、方面軍司令官の指揮下で適宜手薄な部隊へ配属、

あるいは協力した。普通は兵たん基地（支廠）から師団まで（師団には師団輜重五個中隊、連隊、大隊にはそれぞれ大、小行李がある）の輸送の範囲だが、直接第一線に補給する場合もあり、徐州会戦などは苦戦の土肥原兵団に協力して武器をとって戦線に参加したこともあった。

九月十六日神戸港から出港、釜山に上陸した両部隊は保定会戦、石家荘・釜陽河会戦、宋哲元軍掃討戦、河北かん定戦、占領地粛清戦、徐州会戦、武漢攻略戦、普南粛清戦、応山付近の警備、襄東会戦、応水鎮の警備など重要な十一作戦に参加した。この間同部隊だけの戦闘は良郷付近の戦闘（12・10・2、敵は宋哲元軍）新楽付近（同11・5、便衣隊）草仏堂付近（同12・9、第二十六軍）邱県付近（同12・7、宋哲元軍）邱家堤（同12・23、二十六軍）偏店鎮付近（13・2・16、錫陽山軍）廟上村付近（同2・18、共産軍）神代村付近（同3・16、共産一二九師）王碧付近（同5・30、第一四師、一八一師）許良付近（同6・26、共産軍）浪井村（同、護路軍）歩康村付近（同7・20、第一五師）宋圧村付近（同7・22、同）広水付近（14・1・10～12、同）万家店（5・5、湯恩伯軍）大新店（同6・4、第三師）の計十六の戦闘を行った。十四年八



出征時の林博少佐

月二十一日に内地帰還（京都）同二十五日解散した。同事変中の損害は、病没を除き、神代付近の戦闘で戦死百十八、負傷七十八、馬戦死二百五十をはじめ、廟上村で傷三、邱家塊で死二、向堂舗（こうどうほ）で死三、歩康村傷二、大新店で傷二、王碧で傷三、病没十の総計戦死百二十三、戦傷八十八、病没十であった。

同部隊が最もこっぴどくやられたのが昭和十三年三月十六日山西省・神代村（じんだいそん）付近の戦闘であった。同部隊ではこの日を忘れないため、十四年八月の内地帰還と同時に「三一六会」を結成、以来戦後一時途絶えたこともあったが、毎年一回集まり慰霊祭を行っている。故林少佐の墓標は、当時の部下たちで鳥羽市内の常安寺に建てた。

同部隊の二ヵ年余りにわたる中国大陸転戦のもようをいちいち詳述するのは非常にむずかしいので最も大きな損害を出した神代村付近の戦闘にしぼることにした。

大行山脈の急坂の輜重隊

さながら生き地獄

――待ち伏せくった林部隊――

神代村付近の戦闘

昭和十三年二月初め、廬生（ろせい）の〝カンタン夢の枕〟で有明な河北省・カンタンに駐屯する弘前の第百八師団に「十一日、紀元節の佳節を期して出発、なるべく、速やかに山西省・臨汾（りんぷん）を占領せよ」との命令が下がり、同地に駐屯していた第三独立輜重隊は、同師団の指揮下に入って出動せよと命じられた。

カンタンを出発した独立輜重隊（林少佐・以下林部隊という）は河南省の敵中を前進し、渉県（同十八日）を経て、大行（たいぎょう）山脈を横断、十九日夜遅く、百八師団の潞安占領と同時に同城にはいった。カンタンから潞安に至る二百キロの道中には、閻錫山の敗残兵や共産ゲリラが出没したが、彼らは日本軍の五倍以下の兵力の場合は交戦するな、との命令（奪った敵の書類に明記されていた）を守り、積極的な攻撃はかけて来なかった。百八師団は潞安付近を掃討したが、敵はしつように出没、毎日のように夜襲された。

潞安付近にいた林部隊長は、百八師団長から「弾薬、食糧を黎城から潞安まで輸送せよ」との命をうけた。黎城は大行山脈をへだて潞安から約二十八キロの地点。兵たん線はそこまで延びており、兵たん支部には同師団の一個小隊と野砲二門の守備隊がいた。林部隊は一部を残し、林少佐以下将校六、下士官十一、

兵四百九十七の総勢五百十五人、乗馬六十六頭、バン馬三百四十頭、車両三百二十五台という編成で出発することになった。

潞安を出発、十五日潞城で露営し、いよいよ十六日午前四時、黎城向け行動を起こした。城外の五里後（ごりご）部落東端を出るとやがて大行山脈にかかる。ほとんど草木と岩の山、黎城までは幅約四㍍の急造軍用道路がついているが、大行山脈を越すには二十八もの山、坂を登り下りしなければならない。大きな山など登りはじめから下るまで八キロもある。部隊は第一小隊（前田孝少尉、志摩郡阿児町立神出身）第二小隊（石山重郎少尉、度会郡二見町江出身）＝この日は連結のため先行＝第三小隊（小泉貞一少尉、松阪市新町出身）の順で前進する。

そのとき神代村に建立された慰霊碑

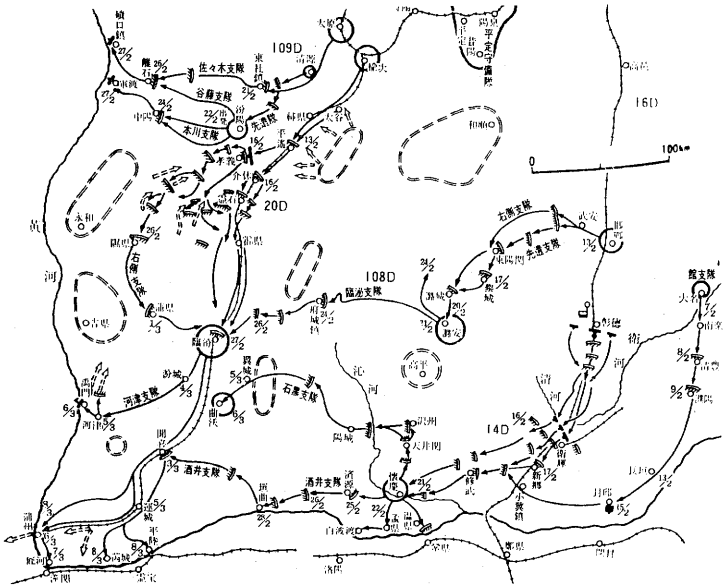
車両と車両の間隔は約二㍍だから部隊の先頭から後尾まで約二キロ（普通四キロ）という長い列だ。輜重車は車と荷物の重さ合わせて五百六十七キロが原則だ。この重さなら車ごとガケのあげおろしが出来るからだ。きょうはカラ車だから比較的ラクな行動。

林部隊は大行山脈を登って行く。連絡の左側はかなり高い斜面、頂上付近には神代村があり、四、五十戸の民家が点在している。敵共産百二十九師（兵力一万五千と推定）は山頂に戦闘指令所を設け、その左

翼（黎城側）三キロの間に十数カ所も陣地を敷き、わが部隊を待ち伏せていた。

迫撃砲、チェコ機銃は射程を合わせ、道路上をにらんでいた。中付近の微子鎮部落（約五十戸）を過ぎた林部隊はやがて神代村にさしかかる。一帯に敵がいるとはまだ気づかない。敵指令所は林部隊の先頭をやりすごし、約二キロにわたる隊列を、各所に配置したチェコ銃座の射程内にすっぽり吸い寄せた。午前九時五十分、まず先頭第一小隊をめがけ、チェコがいっせいに火を吐いた。不意をくった第一小隊は前田少尉が全身に機銃弾を撃ちこまれ戦死をしたのをはじめ、一瞬にして死傷者の山を築く。ついで戦闘指令所以下各陣地が激しい射撃を開始、たちまち部隊はバタバタ倒れる。戦死百十八に対し負傷七十八、馬の戦死二百五十という数字は、いかに不意討ちだったかを物語っている。

林部隊の将兵はただちに応戦を開始した。次項で



第一軍河北戡定作戦経過要図（昭和十三年二月上旬～三月上旬）

のべるが、先進の連絡斥候の要請によって、午後三時ごろ野砲二門が黎城から救援に急行、山越しに砲撃して敵を粉砕、同五時ごろ敵は完全に退却して行った。死傷者を収容した部隊は、先頭はそのまま黎城に向かい、後尾は潞城へ引きかえしたのであった。

度会郡南島町の上村貞吉さんは「生き地獄だった。この戦闘で同年兵の里中才松、森泰助両名も戦死した。里中は私と同じ郷里で妻子もあった。生き残った私は、まったく苦しい思いで帰還しました。彼らのめい福を祈り続けています」と語っていた。

氷砂糖で道順を聞く

――敵の中をゆうゆう前進――

神代村付近の戦闘

第三独立輜重隊本部付軍曹として活躍した伊藤勘次郎さん（鳥羽市鳥羽出身）の経験談――。

行軍には戦備行軍（敵を予想）と旅次行軍（敵襲のおそれがない）があるが、戦備行軍の場合は自衛隊が編成された。連隊大、小行李などは護衛の歩兵をつけてもらって行動したが、独立輜重隊は自ら守らなければならない。

この日、伊藤軍曹は自衛隊長を命じられており、連絡斥候として先進していても、本隊が危険な状態になれば、すぐ引きかえして戦闘を指揮することになっていた。

三月十五日午後五時、潞城城外の五里後（ごりご）部落において林部隊長は大要次のような命令をくだ

延々二キロに及ぶ隊列、この直後襲撃された

した。

一、部隊は潞安――黎城間の輸送任務遂行のため、明早朝現地を出発、黎城に向かわんとする。

二、行軍序列、本部、第一、第二、第三小隊。

三、石山少尉は黎城兵たん支部と諸連絡のため先行すべし。

四、伊藤軍曹は道路斥候及び設営隊となり、部下七名を率い、石山少尉に随行すべし。

五、途中、状況危急の際は速やかにひきかえし、本部に合すべし。

さらに林少佐は「状況が悪いから各隊は十分注意して目的完遂につとめよ」と注意した。斥候は伊藤軍曹以下七騎、鈴木重吉伍長（三重郡菰野町出身）福井勇次郎（奈良県宇陀郡室生出身）吉村政勝（同県高市郡今井町出身）稲葉重郎（多気郡多気町朝長出身）辻田喜三郎（奈良県吉野郡出身）紙浦藤太郎（同）の各上等兵である。

翌十六日午前三時、伊藤軍曹以下七騎は、石山少尉の一

行と前後して五里後部落を出発した。高原の春、東の空は意外に早く白みはじめた。大行山脈の坂を二つ越した所に微子鎮（びしちん）という小さな部落がある。伊藤軍曹は五万分の一の地図を広げて、馬上から地理を確かめる。黎城に至る道路は敵が急造したもので、旧道がいたる所に延びている。部落にはネコの子一匹いない気配。だが、念のため、鈴木伍長に偵察を命じる。

間もなく三十歳位の住民が一人いたのを見つけ、引っ張ってきた。氷砂糖を与え、道順を確かめ、再び坂を登って行く。段々畑にはホウレン草が十㌢ほど伸びている。八騎はヒヅメの音を響かせて山道をかける。

「神代村が見えた」

山際上等兵が大声をあげる。

「神代村がなんだ」

と、吉村上等兵。

「何でもないけど、もうじき黎城だよ」

と、山際上等兵は馬の腹帯を締め直す。三十㍍ほど後方を進んでいた鈴木伍長が「おれの村はきょうから祭りだよ。ここから見えんかなあ。タイコの音でも聞こえんかなあ」とつぶやく。連絡斥候はのんびりした気分で進む。八騎のすぐ近くにチェコが無気味な銃口をそろえていようとは夢にも気づかなかった。敵は、わずかな八騎はやりすごし、主力を待ち伏せているのだ。

「黎城まであと五㌔だよ」

馬上の伊藤軍曹が地図を広げながらつぶやく。（それにしても、付近部落に住民がいないとは、ちょっとおかしいぞ、本隊に連絡しようか）と思ったとき、前方を進んでいた辻田上等兵が突然馬をおりた。

「敵のビラがあるぞ」彼の手には百枚ばかりのビラが握られている。調べると道路のいたるところ、五十㍍おき位で押さえておいてある。「これは情勢が悪い。早く黎城へ行って報告しよう」敵は付近に出没していることが察しられた。全員ただちに乗馬、早がけに移る。大行の二十八の坂を越え、同堂舗（こうどうほ）部落の西側に出た。眼下に横たわるのは水のきれいな清照河の上流だ。いっぷくの絵を見るような景色である。

今の伊藤勘次郎さん

このとき、前方高地でカタカタと敵機関銃の音が聞こえた。

「敵だッ」

無気味なチェコ機銃の音だ。伊藤勘次郎軍曹はすぐに馬を古寺の広場に集結させ、前方高地の見える上手に散開させる。「左右の高地も警戒せよ。だが射撃はするな。敵との距離は千二百もある。兵力不明だが機関銃二、三丁を持っているようだ。敵主力の前衛かも知れぬ。落ちついて注意せよ」そう命じておき、散開態勢のま

まあお向けにひっくりかえるとタバコに火をつける。度胸をすえるためでもある。そして部下に、「おい紙浦、最後のタバコかも分からん、吸えよ」と渡す。みんなも火をつける。鈴木伍長が「特配だぞ」とずのうからキャラメルを出して配って歩く。

そのときだまり屋の稲葉上等兵が珍しく口を開いた。

「斥候長殿、機関銃の音はするが弾はちっとも飛んできませんね」

そういえばそうだ。少しようすを見よう。伊藤軍曹は坂道をおりて、敵情を偵察した。敵は黎城からきた古藤部隊（約二百五十車両）の斥候とぶつかり、清照河をはさんで交戦中とみた。友軍は不利だ。しかし川原を四、五百㍍も走って救援に出ることは出来ない。涙をのんで武運を祈り、部下のところにかけもどった。そして「距離八百、撃てっ」と命じた。

八人の川向こうの敵影に射撃を開始した。交戦十五、六分、わが方を増援本隊とみたのか、敵は退却をはじめた。死神をのがれた古藤部隊の斥候が、うれしそうな表情で丘へかけ上がっていた。

前方の敵は沈黙したが、こんどは前方からカタカタというチェコの音が聞こえた。ドカーンと迫撃砲までまじえた音。「輜重本隊が敵とぶつかったらしい」みんな顔を見合わせる。このとき、誰か坂道をころがるようにかけてきた一瞬、「斥候長殿、敵襲、本隊は激戦中ッ」と報告し、あっというまに引きかえしていった。だれか、確認する間もなかった。それはともかく一刻の猶予もならない。戦闘区署を命令する。「茶房村付近まで引き返して本隊の戦闘に加わろう。紙浦、山際二名は伝騎として直ちに黎城に至り、この状況を報告せよ。そして来援を求めよ。途中、敵の射撃を受けるとも応戦するな、馬が倒れたら山道沿いに

黎城に行け」と二人に固い握手を求める。

「紙浦、山際両名、この重任を命にかけても遂行して参ります」というなり、ひらりと馬にまたがり、たちまち坂道から清照河沿い、黎城方面へ消えて行った。見送った伊藤軍曹は「斥候隊員乗馬、目的地茶房村。古藤部隊もわれに続行」と大声をあげた。かけること十分余、茶房村東端まで引きかえす。すでに弾雨の中にあった。斥候隊は本隊先頭付近に到着した。

たちまち、高木上等兵が側面から狙撃され、左足貫通、落馬する。「全員下馬、左へ散開」本隊の先頭は混乱している。「付近の兵は伊藤軍曹の指揮下にはいれ。小隊の指揮は、以後伊藤軍曹がとる。区分、右より第一分隊十五名は稲藤上等兵、第二分隊辻田上等兵、第三分隊吉村上等兵、以上」さらに「小隊の攻撃目標は前方三百㍍の高地。第一分隊右、第三分隊左、第二分隊中央、射撃開始ッ」念のため「落ちついて撃て、タマを節約せよ」と命じた。

わが方の攻撃態勢をみた敵は、谷をへだてた右高地から迫撃砲チェコを浴びせてくる。小隊はたちまち硝煙のうずに包まれる。時に午前十時、伊藤軍曹は状況の不利を悟り、玉砕のハラを決めた。

「五十㍍前方のミゾに各個前進、左分隊は急進、敵の右翼を包囲せよ」このとき、小隊後方高地を奪った鈴木伍長の一隊は、敵機関銃陣地に猛射を送り、敵陣は浮き足だった。これを見て「前面の敵はにぶったぞ。猛射して前進だッ」と号令して立ち上がった。

その瞬間、迫撃砲弾が頭上にうなり、ごう然とサク裂した。

捕えた敗残兵を解放

――神仏の恵みで九死に一生――

神代村付近の戦闘

敵迫撃砲弾がサク裂した瞬間、伊藤勘次郎軍曹のからだに重い物体がのしかかった。「小隊長、無事ですか」硝煙の中に聞こえる声。辻田上等兵だった。彼は自らタマよけになって小隊長をかばったのだ。「辻田ありがとう、無事だ」と答える顔には涙が光っている。「辻田、よくやってくれた。戦闘はわが小隊の勝利だぞ」と叫んだとき、敵の指揮官の姿が前方高地に現れた。勝ちほこった大きな動作で部下を指揮している。これを見た辻田上等兵「ちくしょう！」と銃を構え、ねらい撃つ。ただ一発、敵指揮官は背負い投げを食ったように、大きく回転して谷底へ墜落して行った。

「念仏弾丸だッ、味わっておけ」と叫ぶ辻田上等兵、伊藤軍曹は「突撃――、突っ込めッ」とどなった。第三分隊が真っ先に突っ込む。第二、第一分隊が続く。銃剣をひらめかしたらもうこっちのものだ。敵はなだれうって谷間へ逃げだした。敵陣地へおどり込んだ小隊は、山と積まれた敵の手投げ弾を奪い、逃げる敵の背にバラバラ投げる。死体五十一を残し、谷間のカゲへ退却して行った。羽田栄次良上等兵（四日市市西坂部町出身）が手早く銃に日の丸をつけ、高地上にひるがえした。時に午前十一時五分。

「全員陣地構築」と伊藤軍曹は命じた。左前方五百㍍には第一小隊がいぜん敵約一個中隊と白兵戦の最中だ。敵は前田小隊の戦闘力が落ちたとみるや手投げ弾の雨を降らせ、突っ込んできたのである。前田少

尉は意を決し、残余の兵をひっさげて突入、壮烈な最期をとげた。代わって指揮をとった西本伍長も単身敵中に切り込み戦死した。浅山伍長も一度は敵を撃退したが、十一時三十分敵弾を受け、西本伍長と枕を並べて散った。

大石大次郎一等兵（南勢町迫間）は敵一個小隊のまっただ中に斬り込み、五人を倒し、さらに敵兵と格闘、敵兵の腹に銃剣を突き刺したまま谷間にころげ落ちて行った。全身十三ヵ所に負傷しながら、のち友軍に収容された。「一人一人でやってこい、おれが血祭りにあげてやる」彼は重傷にあえぎながらも叫んでいたという。

後方の銃砲声はますます激しい。第二、第三小隊の死闘が察しられる。伊藤さんは大東亜戦争は鳥羽防空監視哨（二十五人編成）の哨長で、敵B29の警戒任務中終戦。

○　○　○

連絡斥候で伊藤軍曹の部下として行動をともにした第十三班長（上等兵）稲葉重郎さん（八二）＝多気郡多気町下朝長＝は次のように回想している。

「わたしは十五日に先行しなければならなかったのが、十四日の夕方急に潞安まで酒、タバコなどの下給品を受けとりに行けと命じられ、武装して部下と出かけた。このため出発が一日遅れたのだった。神代村付近で小憩したとき、部落に住民の姿が見えないので〝これはおかしいぞ〟と思った。やがて宣伝ビラを拾い、山あいを二、三人ずつチョロ、チョロと走る住民の姿を見たので、いよいよ敵潜伏に確信を持った。やがて敵の襲撃。本隊に引きかえしたが、すさまじい死闘の最中だった。馬の背にしがみついて弾雨

の中を指揮班までころげ込み、戦闘に加わった。タマに限度があるので、敵兵を四、五十㍍まで引きつけ、命中確実と思われるものだけを射撃した。ひと思いに死にたいと思う一方で、最後の一発まで闘おうとハラを決めました。とても助かる状況ではなかったが、九死に一生を得たのは、捕えた敗残兵を、武器や品物は取り上げたが、殺さずに放したから、神仏のお恵みだったのだろうと思っています」

弾薬も尽き死を覚悟

――全滅寸前に野砲の救援隊――

神代村付近の戦闘

度会郡南勢町相賀浦出身、伊勢市八日市場町在住、田中清之丞さん（八三）は第一小隊（前田孝少尉）の第二分隊長（伍長）だった。第一分隊長は森田新一郎伍長。

第一小隊はダ馬編成でこの日は第二分隊が第一分隊の先を進んでいた。午前九時五十分、田中分隊は下り坂に差しかかっていた。突然、パン、パーンと敵弾がとんできた。（敵弾だッ！）と身構えたとき、迫撃砲弾が後方に集中して飛んで行く。敵は後尾の第三小隊が坂にかかったのをみて、その後方の橋を破壊、わが部隊の退路を切ったのだ。（しまった）と舌打ちしたときは左方の山からおびただしい機関銃弾が走ってきた。あっという間もなく、田中伍長の乗馬は足を貫通され、ひと声高く絶叫してガケ下へころげ落ちて行った。もんどり打って道路に放り出されたが、すぐ態勢を整える。「敵は左前方の山、馬は安全地帯に集結させよ、第一分隊は…」

指をさし、てきぱき指揮を始めた前田少尉は、ものの十数分も経たぬうちに頭、胸、腹など全身数個所を貫かれ、戦死してしまった。志摩郡阿児町出身の優秀な将校だった。

夕立のような激しい弾雨の中、田中軍曹が代わって指揮をとる。武器をもっている兵はわずかに三十二人。たちまち手持ち弾薬が尽きた。

「本部からタマを集めてこい」

絶叫して伝令をとばす。間もなく本部兵器係の西本春一伍長(度会郡南勢町迫間浦)が弾薬をもってかけつけてきた。「よし、下がってよい」といったが、「下がりません、自分もここで戦います」と目を輝かせる。

そのとき軽機(実はぶんどり品のチェコ銃)射手がもたついているのを見つけたので、「よし、おれが軽機を撃つ。西本、分隊の指揮を頼む」田中軍曹はすばやく機銃に弾薬を装てん、応射を開始した。この間にも「西本、姿勢が高いぞ、気をつけろ」と注意して叫ぶ。その瞬間、西本伍長は足をやられた。「そらみろ、下がっておれ」と再び声をかけたが、彼はクツをぬぎ捨て、傷口を手ぬぐいでしばると「これぐらい

颯爽、田中さんの馬上姿

の傷で下がれるか」と不敵な笑いさえ浮かべながら地を蹴り、指揮を続ける。西本伍長がさっき補給してくれた弾薬も尽きかけてきた。いよいよ肉弾で防戦するしかない。この状況を見た敵はどんどん接近してきた。田中軍曹はさっき黎城の百八師団へ救援に走らせた伝令の成功を祈りながら、白兵戦のハラを決めた。じりじり迫った敵は手投げ弾を投げつけてきた。ついにその一発は西本伍長の目の前でサク裂、彼は腹に破片を浴び、戦死した。破片は千人針をつき破り、腹に食いこんでいた。

田中軍曹はこの血染めの千人針を持ち帰って遺族に渡した。分隊の全滅は目前だ。田中軍曹も腰に破片を受けながら奮戦だ。すぐ後ろの第一分隊はすでに全滅、第二、第三小隊も戦闘能力はゼロに近い状態になっている。

（自分ももうすぐやられるのだ。こうなったら一人でも多くの敵兵を殺していさぎよい最期をとげよう）

覚悟を決めて、チェコを握り直す。敵は大胆にも四、五十㍍まで接近、手投げ弾をめちゃくちゃに投げつけてくる。必死にこれをなぎ倒す。

「こん畜生！」

たまりかねた部下が、ゴボウ剣を振りかざして敵中に突進、たちまち弾幕の中に倒れる。いかに勇猛に突進してもゴボウ剣ではおびただしい機銃、手投げ弾には歯が立たない。

「いぬ死するな、敵を引きつけてやれッ」と絶叫する。こうしてあわや玉砕のとき、野砲三門と歩兵一個中隊が救援に到着、山越しに射つりゅう弾を浴び、敵はようやく退却して行った。

戦闘部隊三十二人のうち八人が戦死、残る二十四人全員が負傷していた。

故郷には妻子が待つ

――投降勧告ビラが道路に――

神代村付近の戦闘

部隊の金庫、重要書類を守った安芸郡河芸町北黒田出身、駒田秀男さんは（四十四年没）第五分隊（須藤万夫伍長）第二十四班の特務二等兵であった。

出発前は潞安西北方四キロの蘆家荘を警備していた。十四日の夜八時ごろ、栗本一弥班長（亀山市川合町出身）に呼ばれ「駒田君、あすよりの行動は重大だ。責任は重い。もし敵襲にあい、金器（部隊の金庫や重要書類など）を敵に奪われたときは、陛下や上野主計殿に申し訳ない。その際は切腹してくれ。班長もともに腹を切る」と訓示した。「班長はえらい大役を引き受けてきたものだな」といや味を言ったものだった。このとき駒田特務兵は三十九歳（大正九年兵）班長は三つ年下の三十六歳、お互いに固苦しいことばは使わない。

明くる十五日、正式に命令を受領し、午前六時出発、午後三時半ごろ潞城城外の五里後（ごりご）部落に着き、露営することになった。夕方、上野主計少尉の所へ米を受領に行く。渡されたのたったの四・五キロ（三升）これだけを二十余人で三食に食えというのだ。がまんするより仕方がない。そこで民家から小麦粉を徴発、同夜と翌朝はおもゆにのばして食い、米は昼食用に残した。

翌十六日午前六時起床、同七時出発した。駒田特務兵の車には部隊の金器、将校行李などを積んでいる

ため、きょうの行軍は隊列の中央、第二小隊の先頭を行くことになった。車には自隊用の弾薬箱（千四百四十発入り、約四十八キロ）も積んでいるのでかなりの荷だ。部隊は約二キロにわたる隊列を連ね、幅二・五㍍の道路を前進する。

やがて大行山脈にかかる。山腹は段々畑で、麦が三センチほどに伸びている。栗本班長を先頭に一分隊の第一班長、浅山嘉公上等兵（愛知県西春日井郡出身）の乗馬、駒田特務兵の車が続く。浅山上等兵は、きょうは馬を引っ張って歩いて行く。同年兵なので気やすく声をかける。

「浅山班長、なぜ馬に乗らないのだ」「胃の調子が悪いのだ。人間も四十歳近くなるといかんのう。おれは内地に三人の子供を残してきているが、ひと目会いたいよ」「ふむ、おれも十四歳になる長女がひとりいるんだ」駒田特務兵も長女の顔を思い浮かべる。こんな話を交わしながら進む。あとで思えば、浅山班長がしきりに故郷を思い出していたのは、何か予感でもあったのだろうか。

肩に縄をかけ馬を助けて急坂路を登る我輜重隊

このころ黎城方面から降りてくる友軍の自動車部隊約二百台とすれ違った。やがて急所にかかる。中腹には平坦地があった。ここで停止してクーリー（苦力）を使い馬に水を与える。休む間もなく、後続の師